



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語における否定文の指導に関する一考察 : 否定辞「ない」と助詞「は」を中心として
Author(s)	金, 英敏
Citation	教授学の探究, 13, 1-52
Issue Date	1996-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/13592">https://hdl.handle.net/2115/13592</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_p1-52.pdf



# 日本語における否定文の指導に関する一考察

— 否定辞「ない」と助詞「は」を中心として —

金 英 敏  
(韓国外国語大学校・非常勤)

## 〈目 次〉

### 1章 課題の設定

- 1-1 韓国の日本語教育における否定文の指導の現状と問題点
- 1-2 日本語教育の立場からみた否定に関する言語学の検討
- 1-3 本論文での課題

### 2章 否定文の指導の基礎理論

- 2-1 否定辞「ない」の形態論的・統語論的な特性
  - 2-1-1 否定辞「ない」の形態論的な特性
  - 2-1-2 否定辞「ない」の統語論的な特性
- 2-2 否定の作用域
- 2-3 否定の焦点
  - 2-3-1 焦点とは
  - 2-3-2 焦点としての「は」の働き
  - 2-3-3 焦点領域
- 2-4 否定の作用域と焦点との関係
- 2-5 日本語における否定文の分類
  - 2-5-1 「存在判断型」の否定文
  - 2-5-2 「叙述様式判断型」の否定文

### 3章 教育内容としての否定文

- 3-1 既存の試みの検討
- 3-2 教育内容の構成
  - 3-2-1 否定の焦点
  - 3-2-2 否定の作用域
    - 3-2-2-1 否定の作用域とは
    - 3-2-2-2 主題の「は」と焦点の「は」
    - 3-2-2-3 有題の否定文と無題の否定文

### 3-2-3 否定の焦点(続)

#### 3-2-3-1 マルチプル・チョイス式焦点の否定文

#### 3-2-3-2 外部否定「…わけではない」と「…のではない」

ま と め

参 考 文 献

## 1章 課題の設定

### 1-1 韓国の日本語教育における否定文の指導の現状と問題点

日本語には多様な文の類型がある。判断文、疑問文、命令文以外にも各種の文の類型を列挙することができるが、これらの文は肯定的か、それとも否定的かのどちらかに分類される。つまり、われわれが日常生活のなかで使っているあらゆる文は肯定文か否定文であるといえよう。このように言語表現としての否定文は肯定文と対立関係にあるが、文法的なカテゴリーとしての肯定と否定においても同様で、高橋太郎(1987 b)は「日本語の動詞はみとめかたのカテゴリーにおいてみとめ(肯定)の動詞とうちけし(否定)の動詞が分化している」(p. 50)と述べている。高橋は動詞に限って「みとめ(肯定)」と「うちけし(否定)」の分化を指摘しているが、このような現象は動詞に限らず、形容詞、コピュラ<sup>1)</sup>などを含む「動詞類」<sup>2)</sup>全般に当てはめることができよう。

さて、このような現象は否定文の指導の際にはどのように反映されているのであろうか。一般に日本語の否定文の構成は述語に否定辞「ない」を添加することによってなされる。それゆえ、韓国における否定文の指導は、動詞類の否定形を形成することから始まる。韓国の日本語教材では、否定形は従来の伝統文法で用いられた「未然形」として位置づけられており、動詞類は「動詞、名詞、形容詞、形容動詞」<sup>3)</sup>に分けられている。したがって、次のような肯定と否定の対立を表わす表はどの教材にも見ることができる。

肯定形	否定形
N-だ	N-で(は)ない
A-い	A-くない
NA-だ	NA-で(は)ない
V	V-ない

(N:名詞, A:形容詞, NA:形容動詞, V:動詞)

〈現代日本語(上)1985〉<sup>4)</sup>

1) 本論文は「学生だ」や「きれいだ」などの「ダ」をコピュラと呼ぶ。

2) ここでいう動詞類とは「動詞、形容詞、コピュラ」などの述語の総称を表す。

3) 教材のなかには「形容詞」と「形容動詞」の代りに「イ形容詞」「ナ形容詞」という用語を使うものもある。

4) 梅田裕之・韓美卿(1985)『現代日本語(上)』法文社

上の表を一見するだけでもわかるように、韓国内の否定文の指導は否定文を構成するための否定形づくりを中心として行なわれている。ネイティブ・スピーカーの日本人にとっては全然問題にならないというべき否定形づくりが外国人にとっては非常にわずらわしい存在になるわけである。というのは、日本語の動詞は三つのタイプに分類され、それぞれの動詞の否定形は異なる形を有しているからである。ここでいう動詞の三つのタイプとは、「u 動詞」(従来の五段動詞)、「ru 動詞」(従来の上・下一段動詞)、「変格動詞」であり<sup>5)</sup>「変格動詞」はさらに「カ変動詞」と「サ変動詞」に分けられる。それから、これらの動詞の否定形づくりに関しては、u 動詞は動詞の語尾である「ウ」段を「ア」段に変えて「ない」を添加するように、ru 動詞は語尾の一部である「ル」をとって、「ない」を添加するように指導する。なお変格動詞「来る、する」の否定形はそれぞれ「こない」と「しない」であることを暗記させる。ところが、動詞のなかには「変える」と「帰る」のように発音は同じであるものの、一方は ru 動詞であり、他方は u 動詞であって、その否定形は異なるはずであるが、学習者はよく「変える」の否定形を「変えられない」と誤ってしまう。また、「来る」の否定形を「きない」とする誤用例もよく見られる。動詞以外の場合はそれほど紛らわしくはないが、よく形容動詞「きれいだ」の否定形を「きれくない」と誤った例をみることができるとは。したがって、学習者にそれぞれの動詞の正しい否定形を習得させるまでにはかなりの時間を費やしてしまう。

この問題を解決するために現場で最も一般的に使われている指導方法は、「私は\_\_\_へ帰らない」と「私は\_\_\_を変えない」、「彼女は\_\_\_来ない」と「彼女は\_\_\_を着ない」などの一定のパターンを用いて、空欄のところに適当な単語を入れ替えていくようなやり方である。このパターンは動詞をはじめとして動詞類全般にわたって同様に扱われている。

このように否定形の構成をいちいち例をあげて指導しないと学習者は混乱し、多量の間違った否定述語を構成してしまうのでこのようなパターンによる形態中心の学習は確かに正しい否定形を習得させるという点では評価すべきであろう。しかし、このような学習は否定文の意味や機能からは離れているので、実際のいろいろな場面のなかで使われている否定文の意味を正しく理解することは難しくなる。

もう一つの否定の指導に関する問題として取り上げられるのはつぎのことである。

以前から常に日本語学習者につきまとい、悩ませているものに助詞「は」と「が」の問題がある。この問題は韓国人の学習者の場合も例外ではない。特に、韓国人において誤用の原因となるのは、母語である韓国語の言語体系にも日本語の「は」と「が」に相当する助詞が存在することである。しかし、この二つの助詞は微妙に異なっていて、学習者にとってその相違を弁別することが非常に難しい。それで、つぎのような過ちを犯してしまう。

- (1) a. これはあなたのですか。
- b. \*いいえ、それが私のではありません。

---

5) ここでの動詞の分類は『現代日本語(上)』(梅田・韓)によるが、教材によっては従来どおりに分類しているものもある。

- (2) a. いま、雨が降っていますか。  
b. \*いいえ、雨が降っていません。

日本語の場合、(1a)と(2a)の答として(1b)と(2b)は不適切であるが、韓国語は、それが許容される。この問題を解決するために、韓国の教材のなかには肯定文に存在する「が、を」などの格助詞を否定文では「は」に置き換えるように説明しているものもある<sup>6)</sup>

たとえば、

- (3) a. 雨が降っていますか。  
b. いいえ、雨は降っていません。

- (4) a. お肉を食べますか。  
b. いいえ、お肉は食べません。

のようなもので、要するに、肯定文では「雨が」、「お肉を」であったものを否定文では「雨は」、「お肉は」に変えるように注意している。なお、これはほかの格助詞にも適用されている。

- (5) a. 学校へ行きますか。  
b. いいえ、学校へは行きません。

(5)においても(3)、(4)と同様に肯定文の「学校へ」を否定文では「学校へは」に変えるべきと取り扱っている。したがって、学習者は肯定文を否定文にする時は必ず「は」を添加しなければならぬと認識していると言えよう。

ところが、上記のような指導を進めていく場合、助詞「は」が担っている基本的な表現機能という、より根本的な問題を見逃す結果をもたらす恐れがある。つまり、次の(6)、(7)のような例では、「は」の機能によって、文の意味解釈は変わってしまう。

- (6) a. 花子はお肉を食べますか。  
b. いいえ、(花子は)お肉は食べません。

- (7) a. 明日は学校へ行きますか。  
b. いいえ、(明日は)学校へは行きません。

まず、前掲の(4b)と上の(6b)の「お肉は食べません」という文に注目したい。これらの二つの文は、形式は同様であるが、意味解釈は全く異なる。つまり、(4b)は、「お肉を食べる

---

6) 韓国の全南大校出版部編『大学日本語』には「Nは～Vます」という文型に対立する正しい否定文は次の例のようになると説明している。(筆者翻訳)

・あなたはラジオを聞きますか。  
私はラジオはあまり聞きません。(p. 89)

かどうか」という問題に対する答として「お肉について言えば、食べません」という意味をもつ。一方(6b)は、「花子がたべるものの中にお肉が含まれているか」が問題となり、その答として「花子について言えば、お肉は食べません。しかし、お魚は食べます。」という意味を表わしている。したがって、「お肉について言えば、食べません」という意味は得られない。(5b)と(7b)の例からも同じことがいえよう。(5b)は「学校へ行くか否か」が問題となり、その答として「学校へなら、行かない」という意味を表わす一方、(7b)は、「明日、学校へ行く」ということが問題となり、その答として「明日について言えば、学校へ行くことはしない。しかし、スキーに行く」という意味である。(6b)と同様に、(7b)も「学校へなら、行かない」という解釈は不可能であり、同じ形の否定文でも「は」がどのような機能を担うかによってその意味解釈は異なってくるのである。

このように、否定文において重要な役割を果たしている助詞「は」の機能については触れず、否定文を形成するには必ず「は」を添加することのみを強調すると、上の二種類の文の意味の相違を見極めることは難しくなると言ってさしつかえなからう。

以上に述べたように、現在の韓国における否定文の指導は形態中心のパターンによる指導に偏しているため、肝心の意味の指導や機能の指導という点においてかなり問題を抱えていると言わなければならない。

そこで、本論文では以上のような問題点が解決できるような基礎理論を確立するために、次節でまず言語学的な側面の先行研究を検討してみることにする。

## 1-2 日本語教育の立場からみた否定に関する言語学の検討

前節では、現在の韓国の否定文の指導の問題点として否定文の意味に関する指導がほとんどなされていないことを指摘した。本節では、否定に関する言語学的な側面を日本語教育の立場から検討することにする。

最初に、現在の日本語教育で主に依拠している伝統文法を概観する。伝統文法で重視する否定に関する研究は次の三点に纏められる。

最初に最も頻繁に研究されてきたと考えられるのは「ない」のカテゴリーの問題である。言い換えれば、動詞の後に来る「ない」と形容詞の後に位置する「ない」をどのように分類すべきかに集中している。この問題についての見方はさまざまであるが、(1)前者を助動詞として、後者を形容詞として分類する立場<sup>7)</sup>、(2)前者を助動詞、後者を補助形容詞として分類する立場<sup>8)</sup>、(3)前者を付属形式、後者を付属語として分類する立場<sup>9)</sup>に分けることができる。韓国のほとんどの日本語教材は(1)の分類を採用している。

次に伝統文法で注目したのは、否定辞「ない」が話者の気持ちを表わす主観的な表現を意味するのか<sup>10)</sup>、それとも全く客観的な事実を表わしているのか<sup>11)</sup>をめぐらる問題である。

7) 時枝誠記(1941)は、「ない」には助動詞としての役割を果たすものと形容詞を構成するものが存在することを明記している。詳しくは時枝誠記(1941)『国語学原論』p.292を参照されたい。

8) 金田一春彦(1982)『日本語セミナー2』pp.203-263, 研究社

9) 服部四郎(1960)「付属語と付属形式」、『言語学の方法』pp.461-491, 岩波書店

10) 時枝誠記(1941)『国語学原論』pp.271-273, 岩波書店

11) 金田一春彦(1978)「不変化助動詞の本質」、『日本の言語学 第3巻』pp.232-235, 大修館書店

最後に取り上げられるのは、「ない」と「ぬ」の歴史的な変遷過程に関する研究<sup>12)</sup>である。

以上のような伝統文法の側面からの観点に基づく研究は「ない」そのものの研究としては重要であるが、本論文で追究しようとする「現在の日常生活における否定文の正しい意味解釈の問題」を解決するための手がかりとなるものは残念ながらに等しいと言わなければならない。

ところで、本研究の課題は、日本語学習者にネイティブ・スピーカーの日本人が駆使する否定文を正確に理解させ、自分の意見や考えを正しく伝達させるための教育プランの作成である。このような観点から見ると、伝統文法で重点を置いている研究と本研究とは無関係と言っても差支えなからう。従来の日本語の教材は伝統文法の考え方に依拠しているゆえに、否定文の意味に関する指導が難しかったと考えられる。

それに対して、生成文法及び談話指向的なアプローチによる研究はその様相が異なり、主に否定の意味に関する研究に集中していると言うことができる。これらは従来の伝統文法的な立場からはほぼ不可能に近かった否定文の意味に関する指導を可能にするものではなからうかと考えられる。本論文では、生成文法の立場から否定を論じる岩倉国浩(1974)とKato(1985)、談話指向的なアプローチの立場からの久野暲(1983)を紹介し、このうちKato(1985)の理論を本論文の基礎理論としたい。

これらの研究はそれぞれの観点によって異なるところもあるが、日本語における否定の意味論に関する研究への貢献は大きいものであるといえよう。そのうち、注目に値するのは、否定辞「ない」が持っている固有の働き、すなわち否定の作用域<sup>13)</sup>という概念を導入して否定文を分析しようとしたことであり、もうひとつは、否定文の中で現実に否定されるのは何かという否定の焦点<sup>14)</sup>を明確にしようと試みたことである。

日本語の場合、否定文は述語に否定辞を添加することによって簡単に形成される。しかも否定文を構成する要素は複数の場合もあり、またその意味解釈が必ずしも明確とは限らない。それが日本語学習者を悩ませる原因にもなるが、いままでの日本語教育においては非常に解決しにくかった否定文の意味指導に前述の「否定の作用域」や「否定の焦点」の概念を取入れることによって、その解決案を探り出すことができるのではなからうかと考えられる。

ところが、生成文法及び談話指向的なアプローチによる研究では、これらの二つの概念をめぐってさまざまな観点から議論されてきた。焦点を表わす助詞「は」を重視する岩倉(1974)と否定の作用域を極めて狭いものと看做し、助詞「は」の働きをほとんど無視する久野(1983)、そして否定の理論と焦点の理論を全く独立したものとして把握するKato(1985)などの理論をあげることができる。以下、これらの理論を比較検討することにした。

岩倉国浩(1974)は生成文法の標準理論<sup>15)</sup>に基づいて否定の問題を分析して「否定と数量詞」

12) 西尾寅弥(1972)「打ち消しの助動詞」、『品詞別日本語文法講座』, 明治書院

13) 詳しくは本論文の「2-2 否定の作用域」を参照されたい。

14) 詳しくは本論文の「2-3 否定の焦点」を参照されたい。

15) N. Chomsky の *Aspects of the Theory of Syntax* (1965) において初期理論の枠組みを大幅に変更して確立された理論である。1970年に拡大標準理論が成立する前の理論として位置づけられている。

との相互関係及び「否定と副詞」との相互関係、「否定詞の上昇」の問題に関して論じている。岩倉（1974）は、否定を二つの型——文否定と動詞句否定——に区別し、それぞれの「否定詞の及ぶ範囲」<sup>16)</sup>を次のように基底部規則として提案している。

$$(8) \quad VP \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} (NP) \ V \ (Neg) \\ Neg \\ Quant^{17)} \end{array} \right\} \begin{array}{l} \dots\dots (a) \\ \dots\dots (b) \end{array}$$

(岩倉 1974, p. 113)

さらに、上の(8)の(a)の構造を成している否定文として次のような例をあげている。

(9) John wa kyoo Mary o syootaisi nai. (岩倉 1974, p. 71)

岩倉（1974）は(9)のように「ない」が述語に直接添加している文を「動詞句否定」と呼び、「動詞句否定の及ぶ範囲は基底構造で、否定詞があらわれる文のなかだけである」(p. 73)と定義した。

一方、(8)の(b)に含まれる否定文として次の例をあげている。

(10) John wa kyoo Mary o syootaisuru wake de wa nai. (同上 p. 74)

岩倉（1974）は(10)のような形をしている否定文を「文否定」と呼び、「文否定の及ぶ範囲は基底構造で、否定詞があらわれる文のほかに、その否定詞が統御する文をも含む」(p. 75)と定義した。

しかし、上の規則(8)の(b)には大きな問題点が内包されている。つまり、(b)は岩倉も例としてあげているような「わけ」を伴う場合は別に問題点がなさそうであるが、逆に「わけ」を伴わない文、つまり、前掲の動詞句否定のような形式の単文の場合、(b)は次のような否定文の生成を可能にする。

(11) \*私は車をない。

岩倉の理論には(11)のような文の生成を防ぐ何の制限もなされていない。もうひとつ注目すべきことは、否定文における「は」について、岩倉（1974）は、「は」を伴う否定文を生成するためには「対照の wa 付加変形が適用されたあとで、否定詞付加変形が必ず適用されなければ、文法的な文が生成されない」(p. 87)と述べている。すなわち、「は」を伴う否定文の場合、否定詞の付加は対照の「は」が添加されてはじめて適用することができると理解してよからう。しかし、考察は次章にゆずるが、否定文における「は」の役割は「否定の焦点」を表わす要素にすぎない。日本語において否定の焦点を表わす要素は「は」以外に「も、しか、さえ」などの

16) 本論文の「否定の作用域」に相当するものである。

17) 数量詞を意味するが、本論文では数量詞については触れない。

助詞や「文脈、アクセント」などの要素があるとされる<sup>18)</sup>ので、「は」と「ない」が特定の関係をなしている根拠にはならないと言ってよかろう。Kato (1985) が指摘したように、なぜ「は」と「ない」が特定の関係にあるかに関する指摘がない限り、岩倉の理論は説得力を欠くと言わざるをえない。

以上述べたように、岩倉 (1974) に基づいて「否定の焦点」を考える場合、「は」と他の焦点要素との関係が明確になっていないので、指導上の混乱が予想される。岩倉 (1974) は日本語の否定に関してかなり広範にわたって取り扱っている点では評価すべきであろうが、否定の作用域と焦点との関係においては必ずしも明確に確立しているとは言い難い。

次は、焦点を表わす助詞「は」が否定文の構成に欠かせないものであると説く岩倉 (1974) とは別の視点からこれを論ずる久野 (1983) の理論を検討してみることにする。久野 (1983) は談話指向的な立場から否定の問題を解決しようとする。久野 (1983) の特徴というべきものは「否定の作用域」を極めて狭いものと見る点と否定文における「は」の存在を全く無視するという二点に絞られる。久野 (1983) の説は要約すると次のようである。

- (12) 1. 日本語の否定辞「ナイ」のスコープ<sup>19)</sup>は極めて狭く、通常、その直前の動詞、形容詞、「X ダ/デス」に限られる。
2. このスコープ制限の例外は「マルチプル・チョイス式」焦点<sup>20)</sup>である。
3. 主題は否定辞のスコープの外にある。

(久野 1983, p. 140, (71))

さらに、(12)の仮説に適用するものとして次の例をあげている。(下線の部分は焦点を表わす、筆者注)

- (13) a. 君ハ、コノ時計ヲパリデ買ツタノカ。
- b. ??イヤ、パリデ (ハ) 買ワナカッタ。

(久野 1983, p. 126(26))

- (14) a. 君ハ、パリデ時計ヲ買ツタノカ。
- b. イヤ、パリデハ時計ハ買ワナカッタ。

( // (27))

- (15) a. 僕ハ時計ヲパリデ (ハ) 買ワナカッタ。

( // p. 131(39 b))

- b. 今日ハ車デ来ナカッタノデ、歩イテ帰ラナケレバナラナイ。

( // p. 128(30 a))

18) この分類は Kato (1985) によるが、詳しくは本論文の「2-3 否定の焦点」を参照されたい。

19) 本論文の「否定の作用域」に相当するものである。

20) 久野 (1983) によれば、マルチプル・チョイス式焦点とは、反復して行われる出来事に関するインフォメーションとして、焦点にあらわれ得る要素の種類が極めて限定されている場合を表わすと説いている。例としては通勤の乗り物などがある。

久野 (1983) によれば、例文(13)の意味上の否定の焦点は「パリデ」である。したがって、この文が意図するのは、問題の時計を買ったのは「パリデ」ではなく、よその場所であるという意味の表現である。ところが、前掲の説によると、この文において否定辞のスコープの中に入りうるのは動詞「買(う)」のみである。結局、「意味上の否定の焦点と構文法上の否定の焦点とが合致しない」(p. 127)ので、(13 b)は不適切な答になるということであろう。反面、(14 b)は、意味上の否定の焦点と構文法上の否定の焦点が合致しているので、ごく自然な答になっているという。

一方、(15)の例は意味上の否定の焦点は動詞「買(う)」、「来」ではなく、「パリデ」、「車デ」であろう。久野 (1983) はこれらの例が自然な否定文として認められるのは「マルチプル・チョイス式」焦点であるからであると説いている。

ところが、上の (14 b) の文で助詞「は」の働きを認める場合、全く違う意味解釈が得られる。すなわち、動詞「買(う)」は否定されることなく、「パリデ何かヲ買ツタ」ことを前提としてパリで買ったもののなかに「時計」は入っていないという意味になるわけである。久野 (1983) では否定文における「は」の働きを無視しているので、氏の理論ではこの点を説明するには多少無理があるのではなかろうか。

以上検討してきたような久野 (1983) のアプローチは助詞「は」の存在を認めていないが、否定の焦点を導入して否定文の意味を解決しようと試みた点では否定の意味論における新しい視点を提供しているというべきであろう。しかし、久野の理論には次のような不明確な点も見られる。

- (1) 久野のいう否定のスコープの概念と否定の焦点の概念は必ずしも明確に定義されていない。
- (2) 否定文における助詞「は」の役割を全く無視している。

したがって、久野の理論に基づいて否定文を指導する際には、上の二点によって混乱をもたらすと予想される。特に、助詞「は」を無視して日本語の否定文を分りやすく説明することは相当難しいと考えられる。

最後に、生成文法の「改訂拡大標準理論」<sup>21)</sup>の立場からこの問題に取り組んでいる Kato (1985) を検討する。Kato (1985) は上の二人の視点とは違って「否定の作用域」と「否定の焦点」を、否定の理論を特徴づける下位概念とする。すなわち「否定辞の作用域」は「それを含む最小の節であり、文境界を越えることができない」(Kato 1985, pp. 56-57, 加藤 1989, p. 210) と定義し、「否定の焦点」は「ある特定の文または文脈のなかで実際に否定されていると解釈される構成素のことである」(Kato 1985, pp. 58-60, 加藤 1989, p. 210) と述べ、これらの二概念は全く独立しているものとして位置づけている。さらに氏は焦点を表わすさまざまな要素を取り上げてそれぞれの働きの分析を試みている。特に、助詞「は」を、焦点を表わす要素

21) 拡大標準理論の後に確立された理論として 1973 年から 1981 年に統率束縛理論が発表されるまでの理論である。

の一つとして取り扱い、「は」の働きによって否定文の意味解釈が異なってくることを明らかにしている。なお、文中において実際に否定されていると解釈されるものは「否定の作用域」と「否定の焦点」が互いに重なり合う構成素によって決められると主張する。このように Kato (1985) は否定の理論を「否定の作用域」と「否定の焦点」という下位概念を用いてモジュール化することによって岩倉 (1974) や久野 (1983) では明確にされなかった問題を明快に解決している。否定文の意味を教育内容に取入れようと試みる本研究においては「作用域」と「焦点」をそれぞれ独立した下位概念としてとらえ、「作用域」を構造的に規定していることは非常に示唆に富む理論であると言えよう。さらに、本研究で取り扱おうとする助詞「は」に関する分析も綿密に行なわれていて今までは明確に説明できなかった否定文の意味に関する指導において大いに役立つ理論であると判断される。

### 1-3 本論文での課題

前節では「否定」に関する言語学的な研究を考察した。その結果、韓国での否定文の指導の際、非常に欠如している意味に関する指導を改善するためには「否定の作用域」と「否定の焦点」という両概念を取入れ、それらに基づいて教育プランを作成し、それに基づいて指導すべきであると考えられる。ところが、上の両概念は学者によってとらえ方が異なり、基礎理論としてどの理論に基づくべきかの選択の余地が残る。そこで、本研究では、前節の考察の結果、学習者にとってわかりやすい教育プランを作成するためには、Kato (1985) の理論が最も適切であると考えられ、Kato (1985) 及び加藤 (1989) を基礎理論として採用することにする。

Kato (1985) の理論は、前節で概観したとおり「否定の作用域」と「否定の焦点」を区別し取り扱い、両概念の相互作用によって否定の焦点が決定されるという点で示唆するところがおおい。さらに「否定の作用域」を構造的に規定し、複文における補文には「ない」の影響が及ばないことを明確にした点で評価に値する。また、「否定の焦点」に関して精細な検討を行ない、否定文における焦点の役割や日本語の焦点を表わす要素、否定の作用域と焦点の相互関係などが具体的に分析されている。勿論、Kato (1985) の理論には否定文の指導時に適さない部分がないわけではないが、否定文が抱えている論点のほぼ全部を網羅して論じている点で本論文の基礎理論とするに最もふさわしい理論であると判断される。なお、基礎理論のなかで、「主題」の「は」と「対照」の「は」との関係と、「焦点領域の議論のなかの一部の問題」に関しては Kato (1985) を基本として、前者は寺村秀夫 (1984, 1993) 及び益岡隆志 (1987, 1991)、後者は益岡隆志 (1987, 1991) を参照することにする。

次章では Kato (1985) の理論を考察し、本研究の基礎理論を確立することにしたい。しかし本論文では Kato (1985) で論じられたすべてを扱うことは難しい。したがって、本論文の 2 章では Kato (1985) の 3 章～5 章で論じられた概念を中心に検討していきたい。それから、Kato (1985) の 3 章に提案されているもののなかで、従来の文法では形容詞として分類されている経験や存在を表わす「ない」を、Kato (1985) は従来の文法では助動詞と分類した「ない」と同じものとして看做すが、本論文では、これに関しては触れずに、Kato (1985) の枠組みに即して論を進めていくことにする。なお、Kato (1985) の 5 章以後の否定と数量詞との相対的作用域の問題、否定と副詞の問題や橋表現 (後述) などは扱わないことにする。最後に、本論文の 3 章では 2 章で確立した基礎理論に基づいて教育内容の構成を試みる。なお、本論文で用いて

いる用例のなかで、出典を示さないものは筆者の自作であることを予め断っておく。

## 2章 否定文の指導の基礎理論

### 2-1 否定辞「ない」の形態論的・統語論的な特性

本節では日本語の否定文の標識である否定辞「ない」の形態論的・統語論的な特性を考察する。まず、否定辞「ない」が文中にどのように現れているかを調べてみることにする。

- (1) a. 彼はそのパイを食べられなかった。
- b. あまりおもしろくなければ, やめましょう。
- c. 私は先生ではなくて, 学生です。
- d. この辺はあまりきれいではない。

上の例の(1 a)は「ない」が動詞に添加され、過去形を表わしている。(1 b)は形容詞に添加されて条件形になっている。また(1 c)と(1 d)はコピュラの否定形として、それぞれ連用形、終止形になっている。

上の例から、否定辞「ない」はいくつかの形態論的・統語論的な特性をもっていることがわかる。その特性とは、まず、「ない」が活用をするということであり、その活用は動詞の活用でなく、形容詞と同じ活用である。次に、「ない」は動詞、形容詞、コピュラを含む動詞類の後に位置しているということである。言い換えれば、「ない」は動詞類以外の範疇にはあらわれないということを意味するのである。このような現象は日本語のような膠着語尾の述語が表わす特殊な表現形式であると言えるが、本節では論を進めていくうえで必要とされる否定辞「ない」の形態論的・統語論的な特性をKato (1985)に基づいて検討したい。

#### 2-1-1 否定辞「ない」の形態論的な特性

伝統文法はもとより生成文法においても一般に接辞が派生接辞と屈折語尾に分けられることは周知のとおりである。屈折語尾には、文の時制を表わす要素である(以下、便宜上ローマ字表記にする)形容詞の「-i」や動詞の「-(r)u, ta」や不定詞「-i/φ」、連用形の「-te/-de」、条件形の「-(r)eba」, 「-tara」、命令形の「-e/-ro」がある。派生接辞には、否定を表わす「-(a)na」、受動の「-(r)are」、使役の「-(s)ase」、願望の「-(i)tai」などが含まれる。

ところで、上の例(1)はいずれも派生接辞である「-(a)na」が屈折語尾である「-ta, -reba, -te, -i」の前に位置していることがわかる。これは、屈折語尾と派生接辞の基本的な相違点というべきであるが、その相違点はKato (1985)が指摘している次の二点に纏められよう。

- (i) 「派生接辞は屈折語尾の前に来るが、その逆は成り立たない」(p. 20)
- (ii) 「派生接辞は随意的であるが、屈折語尾は義務的である」(p. 20)

上のKato (1985)の指摘と「ない」がもつ特性を照らし合せてみると、否定辞「ない」は派生接辞に属することが判る。

次は否定辞「ない」と他の派生接辞との間の位置について考察することにする。

- (2) a. \*ake-na-rare-ru  
b. \*ake-na-ta-i  
c. \*ake-na-sase-ru
- (3) a. ake-rare-na-i  
b. ake-taku-na-i  
c. ake-sase-na-i

(3)のように否定辞が他の派生接辞の後に来る場合、文法的な文が成立するが、(2)のように否定辞が派生接辞の前に来ると、非文法的な文になってしまう。これは否定辞の後に派生接辞が位置することはできないことを示すのである。つまり、Kato (1985) が指摘したように否定辞は同じ派生接辞のなかに含まれている他のどんな要素よりも屈折語尾に近い位置を占めるという性質を持っているのである。

以上より否定辞「ない」は形態論的な側面からみると、派生接辞の領域に属し、派生接辞のなかでは最後の位置、すなわち、屈折語尾の直前に位置するということができる。

#### 2-1-2 否定辞「ない」の統語論的な特性

Kato (1985) は否定辞「ない」を次の様な三つのタイプに分類した。

- (4) a. タイプ I : tsumarana-i/mooshiwakena-i  
b. タイプ II : tabe-na-i/(-ga)na-i  
c. タイプ III : akaku na-i/shizuka de na-i, sensei de na-i

上の分類の特徴は次のように説明することができよう。まず、「ない」が統語論的に独立的な存在であるか否かによってタイプ I 対タイプ II・III のふたつのグループに分けられよう。すなわち、タイプ I の「ない」は後述するように統語論的に独立していない反面、タイプ II と III は統語論的に独立的な存在である。さらに後者のタイプ II と III は形態論的に独立しているか否かによって形態論的に独立していないタイプ II と形態論的に独立しているタイプ III に分けることができる。

この三つのタイプはいずれも次に考察する「否定の作用域」と「焦点助詞」の添加に深く関わる。ここではまず、Kato (1985) に即して三つのタイプの統語論的特性を考察する。

##### (i) タイプ I

タイプ I に含まれる語彙項目は次のようなものである。

- (5) すまない            \*すむ (別の意味の場合は成り立つ)  
そしらぬ            \*そしる ( // )  
つまらない        \*つまる ( // )  
もうしわけない    \*もうしわけある/\*もうしわけがある

なにげない      \*なにげある  
あじげない      \*あじげある

(Kato 1985, p. 28(28))

これらの例は Kato が指摘したように、次のような特性を持つ。

- (a) 対応する肯定形が存在しない
- (b) 肯定形が存在しても意味が違う
- (c) 文中で否定対極表現<sup>22)</sup>と共起しない

このなかで(c)についてはもう少し詳しい説明を必要とすると思うので、以下に簡単に説明する。

- (6) a. \*私は遅れたことしか すまないと思っている。
- b. \*この本しか つまらない。

(6)の例はいずれも「しか」と「ない」が同じ節のなかに存在するにもかかわらず、非文法的な文である。では、次の例はどうであろうか。

- (7) a. 仕事はもう全部すんだ?
- b. いや、まだ半分しか すまないよ。 (Kato 1985, p. 29(32))
- (8) a. このパイプには、ゴミがつまっていましたか。
- b. いいえ、凍った雪しか つまっていませんでした。 ( // (33))

上の(6)とは違って(7), (8)の例はごく自然な否定文である。つまり、上の(6)と(7), (8)が示していることは「すまない」と「つまらない」が「しか」と共存できるのはそれらが「すむ」や「つままる」という動詞の否定形として用いられた場合に限定されるのである。言い換えれば、形のうえでは(6)と(7), (8)の「すまない」, 「つまらない」は同じであるが、それぞれが持っている語彙特性は全く異なるということである。つまり、タイプ I に属している「ない」は統語論的には分解できない一つのかたまりとして存在し、そのかたまりの内部に文中の他の要素が自由に関わり合いをもつことはできないのである。したがって、タイプ I に含まれる単語はそれ全体を語彙目録のなかに記載しておくべきものであると言えよう。

さらに、Kato (1985) は全く同じ現象がいわゆる否定接頭辞「無、不、未、非」を伴う単語

22) 太田 (1980) によれば、「否定対極表現」というのは、否定の作用域の中にあられるとされる表現で、日本語でいえば、「決して、びた一文」(筆者省略)のようにもっぱら否定で用いられる表現をいう(p. 281)と述べている。また、マグローイン (1990) は、「日本語の否定表現には〈何も、誰も〉のような表現、〈しか〉、副詞〈ちっとも、めったに、あまり、ぜんぜん、別に〉など、〈ひとつも、ひとりも〉(筆者省略)などがある」と述べる。詳しくは Kato (1985) 第 8 章 pp. 146-160 を参照されたい。

にも見られるということを指摘している。

- (9) a. \*この法律しか 不公平だ。  
b. この法律しか 公平でない。
- (10) a. \*彼しか 無関心だ。  
b. 彼しか 関心がない。
- (11) a. \*この作品しか 未完成だ。  
b. この作品しか 完成してない。
- (12) a. \*彼女しか 非常勤だ  
b. 彼女しか 常勤でない。

上の例の(a)文はいずれも、否定接頭辞がそなえている否定の意味がその単語の内部に限定されていて他の構成素にその影響を及ぼすことができない。それに対して(b)文は、否定対極表現「しか」の生起が許されているので、否定辞がその影響を文全体に及ぼしていることを示している。このことは否定接頭辞はいうまでもなく、タイプIに属する「ない」もそれらが添加されている単語以外の構成素には否定の影響を及ぼさないということを意味している。

したがって、本論文では否定接頭辞を伴っている単語やタイプIに含まれている単語は考察の対象からはずすことにする。

#### (ii) タイプIIとタイプIII

前述したように、統語論的に独立しているという共通点を持つタイプIIとIIIの「ない」は更に形態論的に依存しているタイプIIと形態論的に独立しているタイプIIIに分けられる。まず、次の例をみることにしよう。

- (13) a. 彼はタバコを吸わない。  
b. 彼は宿題をしなかった。
- (14) a. 彼は先生でない。  
b. ここはしずかで/じゃない。
- (15) a. このかばんは重くない。  
b. 彼女の髪は長くない。
- (16) a. この部屋には机がない。  
b. 南半球にはまだ行ったことがない。

(Kato 1985, p. 31, (40)-(43))

上の(13)~(15)はそれぞれ「動詞+ない」、「コピュラ+ない」、「形容詞+ない」といった、「ない」

が動詞類に添加している例であり、(16)は存在や経験を表わす「ない」であることを示す。このように各々の述語に分布している「ない」を対象として形態論的に依存しているか否かを判断する方法はどのようなものであろうか。

Kato (1985) は動詞類と否定辞の間に焦点助詞を添加した場合、「しー」によるサポートが必要であるか否かによってそれを判断することができると提案している。<sup>23)</sup> すなわち、(13)を例とすれば次のようになるわけである。(ここで「は」は焦点助詞を示す)

- (17) a. 彼はタバコを吸いーはーしーない。  
b. 彼は宿題をしーはーしーなかった。  
c. \*彼はタバコを吸いーはーない。  
d. \*彼は宿題をしーはーなかった。

(17)は動詞語幹と「ない」の間に焦点助詞が添加される時、必ず「しー」によるサポートが必要であることを示している。次は(14)と(15)との例に当てはめて見ることにする。

- (18) a. 彼は先生でーはーない。  
b. ここはしずかでーはーない。  
c. \*彼は先生でーはーしーない。  
d. \*ここはしずかでーはーしーない。

- (19) a. このかばんは重くーはーない。  
b. 彼女の髪は長くーはーない。  
c. \*このかばんは重くーはーしーない。  
d. \*彼女の髪は長くーはーしーない。

(18)と(19)は(17)とは全く反対の様相を見せている。つまり、(17)は「ない」が動詞語幹から分離される時、必ず「しー」によるサポートを必要とするのに対して、(18)と(19)の場合は、「しー」によるサポートを許容しない。したがって、後者の「ない」は形態論的に独立しているということができよう。

ところが、表面上独立しているかのように見える(16)の例はどうであろうか。(16)の例に現れている否定辞「ない」は(16 a)のように存在を表わす「ある」や(16 b)のように経験を表す「ある」の否定の意味を表すものである。これに焦点助詞を添加すると、次のような文になる。

- (20) a. この部屋には机がありーはーしーない。  
b. 南半球にはまだ行ったことがありーはーしーない。  
c. \*この部屋には机がありーはーない。

---

23) Kato (1985) は「しー」サポート以外に、独自のアクセントを持つか持たないかによるテストも行っている。詳しくは Kato (1986, pp. 31-32) を参照されたい。

d. \*南半球にはまだ行ったことがありーはーない。

上に見られるように、(20)の例は全く上の(17)と同じ様相を見せている。これを根拠として Kato (1985) は、(16)の例の否定辞「ない」は「形態論的に依存形式である」(p. 31)と主張している。氏のこのような主張は(16)の「ない」を独立しているものとみる既存の見方とは全く異なる。この問題は言語学の側面からは非常に興味深いものであって、今後の言語学の研究の領域でさらなる研究がなされるべきであると考えられる。本論文ではこの問題に関しては指導内容から除外することにする。なぜならば、本論文で対象とするものは動詞類に付属している「ない」であり、非存在を表す「ない」と動詞類に付属している「ない」はその性格が大いに異なるからである。ここでは動詞語幹に焦点助詞が添加されたときの「ー」の現れ方によって「ない」をタイプIIとIIIに分けられるということのみを参考にする。

以上のことをまとめてみると、日本語の否定辞は派生接辞に属し、統語論的・形態論的な特性によって三つのタイプに分けられるということがわかった。以下では、統語論的に独立しているタイプII（非存在を表す「ない」を除く）とタイプIIIのみに限定して論を進めていくことにしたい。

## 2-2 否定の作用域

前節では、否定辞の形態論的・統語論的な特性について考察した。その結果、日本語の否定辞は派生接辞に属し、形態論的・統語論的な特性によって三つのタイプに分けられるということがわかった。これからは三つのタイプのうち、タイプIIとIIIに限定して否定の意味解釈の問題を考察していくことにしたい。

まず、否定文の意味解釈の問題を解釈するためには、Kato (1985) にしたがって、(i) 否定辞がその影響を及ぼし得る範囲はどこまでなのかという、すなわち、「否定の作用域」に関する問題と(ii) どのような条件のもとで特定の読みが得られるか、すなわち、「否定の焦点」の問題が核心となる概念であると想定し、これらについて考えてみることにする。以下、本節では(i)を、次節では(ii)を考察する。

否定辞がその影響を及ぼし得る範囲を「否定の作用域」と呼ぶことにするわけであるが、Kato (1985) は、それを次のように定義している。

(i) 否定の作用域は否定辞が結合している節である (Kato 1985, p. 56)

Kato (1985) によれば、「節」とは、主題句を除いた残りの部分すべてのことを指すことになり、<sup>24)</sup>文中の主題として機能する構成素は否定の作用域の中には含まれないということになるわけである。

24) Kato (1985, p. 56) は、Chomsky (1977) にしたがって主題句 (topic phrase: TOP) が次のような構造的な位置を占めると想定している。

[S' TOP[s...]]

S' を文、S を節と考えると、上の構造で、主題句は節ではなく文によって支配されることを表す。

上の定義によれば、否定の作用域は非常に広い。前章で検討した久野(1983)の「否定辞「ナイ」の否定のスコープは、それが附加されている動詞、形容詞、「名詞/形容動詞+ダ」に限られる」<sup>25)</sup>(p. 127)という定義とは対立をなしていると言える。このような対立は、当然否定の作用域は果たしてそれが結合している節全体であろうかという疑問を提起する。

ところで、日本語の表現のなかには、「否定の作用域を確かめるためのリトマス試験紙のような役割を担う」(太田 1980, p. 281)ものがある。「だれも、なにも、しか」などがそれであるが、これらの特徴は必ず否定の作用域内に存在しなければならないということである。以下、これらの要素の一つである助詞「しか」をもちいて、否定の作用域を確かめてみることにする。

- (21) a. 彼はゼミの報告しかしなかった。  
b. 太郎はコーヒーしか飲まない。
- (22) a. 彼しかゼミの報告をしなかった。  
b. 太郎しかコーヒーを飲まななかった。

上の(21)は「しか」が目的語の位置に現れている。一方、(22)の場合、「しか」は主格助詞「が」に置き換えても文法的な文であるには変らないので、主語の位置に現れていると言える。したがって、(21)と(22)のような一つの節でなされている単文の場合、否定の作用域は節全体であると言えよう。

次に、二つ以上の節で構成される複文を考察してみる。([ ]は補文を示す)

- (23) a. 太郎は [花子しか発表しなかった] ことを報告した。  
b. 太郎しか [花子が発表した] ことを報告しなかった。
- (24) a. 花子は [英語しか話せない] 人を知っている。  
b. 花子しか [英語が話せる] 人を知らない。
- (25) \* a. 太郎は [花子しか来る] ことを報せななかった。  
\* b. 太郎しか [花子が来ない] ことを報せた。
- (26) \* a. 花子は [英語しか話せる] 人を知らない。  
\* b. 花子しか [英語が話せない] 人を知っている。

上の (23 a)-(23 b) は、「しか」と「ない」がそれぞれ補文と主文のなかに共存している。このような現象は (24 a)-(24 b) も同様である。しかし、(25 a)-(25 b) や (26 a)-(26 b) の「しか」と「ない」の分布は異なっている。すなわち (25 a) の場合、「しか」は補文のなかに、「な

---

25) 久野(1983)はこの仮説の唯一の例外としてマルチプル・チョイス式焦点が存在することを示す。

い」は主文に位置している。一方、(25 b) は (25 a) とは逆に「しか」は主文に、「ない」は補文のなかに存在する。また、(26 a) は「しか」は補文のなかに、「ない」は主文のなかに位置している。一方、(26 b) は「しか」は主文に、「ない」は補文のなかに存在する。

以上のことは、「しか」と「ない」が同じ節のなかに共存するとき、文は文法的であるが、「しか」と「ない」が共存しないときは、非文法的になるということをよく表している。これらを根拠として加藤 (1989) はさらに次のように作用域の概念について言及している。

(ii) [否定の作用域] はそれを含む最小の節であり、文境界を越えることができない<sup>26)</sup>

(加藤 1989, p. 210)

以上、否定対極表現「しか」を用いて否定の作用域を確認してみた。その結果、久野 (1983) の「否定のスコープはそれが附加されている動詞、形容詞、「名詞、形容動詞+ダ」に限られる」という見解よりは、Kato (1985) 及び加藤 (1989) による定義が適切であると云わなければならない。このように否定対極表現を用いて否定の作用域を構造的に規定し、独立した下位理論として位置付けていることは Kato (1985) の理論のすぐれた側面であると云ってよかろう。

### 2-3 否定の焦点

前節では否定の作用域の概念に関して考察した。その結果、否定の作用域は「主題」を除いた節全体であるという加藤 (1989) の見解が適切であることがわかった。このことは作用域のなかに存在しない構成素はいかなる場合でも否定されないということを意味する。逆に言えば、作用域のなかに存在する構成素であればすべて否定されうるということである。

本節では、Kato (1985) にしたがって、否定文を特徴付けるもう一つ概念である否定の焦点について考察する。焦点の本質はなにか、否定文において焦点はどのように機能するかを考察することにより上記の疑問が解決されると考えられる。

#### 2-3-1 焦点とは

本格的に焦点理論の考察に入る前に、まず否定文において焦点が意味するのはなにかについて考えてみよう。

否定の作用域に対して、否定の焦点とは、「作用域のなかにあって現実に否定されている構成素である」ということを想定し、次の例をもってそれを確認してみる。

(27) 太郎はレストランでコーヒーを飲まなかった。

上の例文(27)の否定の作用域は「レストランでコーヒーを飲む」である。Kato (1985) によれ

---

26) Kato (1985, p. 57) は、このような作用域の定義の唯一の例外として、「節は橋表現に従属する」と述べている。橋表現は「～ことがない」、「～にいたらない」などを含むものであり、例としては次のようなものがあげられる、

- ・太郎は [花子にしか会った] ことがない。
- ・太郎は [一次試験しかパスする] にいたらなかった。

ば、否定の作用域のなかにあるすべての構成素は否定の焦点となりうる。すなわち、次の(28)に示すように(27)の後にはどのような文脈がつづくかによって、現実に否定されている構成素は替えることができる。

- (28) a. しかし、研究室でコーヒーを飲んだ。(レストランで)  
b. しかし、レストランでアイステイーを飲んだ。(コーヒー)  
c. しかし、レストランでコーヒーをこぼした。(飲む)  
d. しかし、レストランでステーキを食べた。(コーヒーを飲む)  
e. しかし、家でコーヒーゼリーを食べた。(レストランでコーヒーを飲む)

たとえば、(27)のあとに (28 a) が来ると、「太郎がコーヒーを飲んだ」ということを認めた上で、コーヒーを飲んだ場所が「レストラン」ではないということを表す文になる。したがって、この場合、否定の焦点は「レストラン」である。同様に、(28 b) は「太郎がレストランでなにかを飲んだ」ことを前提したうえで、飲んだものとして「コーヒー」は適切ではないということを表し、「コーヒー」が否定の焦点となる。(28 c) は、「太郎がレストランでコーヒーをどうかした」ことは確かであるが、それが「飲む」ということではなく、「こぼした」ことを表しているので、この場合の焦点は動詞「飲む」であるといえよう。同じように (28 d) が後につづくと、「太郎がレストランで何かをした」にはまちがいないが、それが「コーヒーを飲む」という動作ではなかったことを意味し、否定の焦点は「コーヒーを飲む」として決められる。最後に、(28 e) は「レストランでコーヒーを飲む」と「家でコーヒーゼリーを食べた」との対照により、節全体が否定されている。したがって、この場合は「レストランでコーヒーを飲む」という節全体が焦点となる。

このように、否定の作用域のなかには存在する構成素は、すべて否定の焦点となる可能性をもっているとする Kato (1985) の指摘は適切であると考えられる。

ところで、上の例文(27)のように作用域のなかに複数の構成素が存在する場合、それらの複数の構成素のなかから一つを選択して否定の焦点を決める時、どのような方法をとればよいかという問題が生じる。その手がかりは、文中の構成素が焦点であることを示してくれる要素である。その要素に関して Kato(1985)は「「は、も、さえ、だけ、しか」などの助詞、「～のは～だ」のような強調構文、あるいは強調アクセント、そして文脈による場合」(p. 61)などが存在していると指摘している。たとえば、上の(27)で「レストラン」だけを否定しようとする、次の四つの方法が考えられる。

- (29) a. 太郎は、レストランではコーヒーを飲まなかった。(助詞「は」添加)  
b. 太郎は、レストランでコーヒーを飲まなかった。(強調アクセント)  
c. 太郎がコーヒーを飲んだのはレストランではない。(強調構文)  
d. 太郎は、レストランでコーヒーを飲まなかった。  
しかし、研究室で飲んだ。(文脈)

以上、述べたように否定の焦点とは、作用域のなかにあつて現実に否定されていると解釈される構成素のことであり、焦点をマークする要素としては「助詞、強調構文、強調アクセント、

文脈」などが存在していることがわかった。つぎは、これらの焦点を表す要素のうち、韓国人の学習者にとって難しい問題とされる助詞「は」に限定してその働きを考察することにしたい。

### 2-3-2 焦点としての「は」の働き

前項では、焦点を表す要素に助詞「は」も含まれることを確認した。助詞「は」は従来の文法では「係助詞」として呼ばれてきたものであり、文中のさまざまな位置に現れ、その位置によって機能が異なる特徴をもっているものである。換言すれば、助詞「は」の機能は「主題」と「対照」であると要約できる。このような二重の機能は否定文の場合、文の意味解釈に大きく影響を及ぼす。そこで、本項では助詞「は」の表現機能を考察し、否定文との関わりを探ってみることにする。

前述したように、助詞「は」は二重の表現機能を担っている。これに関連して、寺村(1991)の次のような特徴付けは注目すべきであろう。

「ハ」の、文中のある要素をとくに際立たせ、ある対比的効果を生じさせる働きを基本と見、それがあつた条件下で、対比の相手である影<sup>27)</sup>の存在が意識されず、単にそこに聞き手の注意をとくに惹きつけて、あとの陳述と結びつけるだけの場合を、「(単なる)主題」を表わすものとする (p. 41)

これらの二重の機能は文のなかにはどのように現れているかをみることにしよう。

(30) 花子はテニスはできるが、スキーはできない。

例文(30)は普通の文脈では、花子について叙述している文であると解釈できよう。したがって、最初の「花子は」の「は」は主題を表している。一方、「テニスは」と「スキーは」は互いに対立しており、「テニスは」の「は」と「スキーは」のような「は」は「対照」の「は」と言える。

しかし、問題は「主題」と「対照」の区別が必ずしも明確とは限らないということである。例えば、上の(30)の後に、

(31)しかし、太郎はテニスもできるし、スキーもできる。

---

27) 寺村(1993), 『寺村秀夫論文集II』pp. 68-69. 寺村は影という概念を次のように説明している。「XサエP」というのは、

a. <XについてPである>コトを伝えると同時に、

b. <Pと結びつくものとして誰でも通常Xは思いつかない、言い換えれば、Pと結びつくもののセットのなかに通常Xは入らない、それにもかかわらず、ここでは事実としてXがPと結びついている>ということを暗に言つて、事の異常さを強調しようとする形式である。

このbのような意味が「影」である。

この説明は「は」にも適用される。つまり、「XはP」というものは、<XについてPである>ことを伝えると同時に、<~Xについて~Pである>という意味も含んでおり、後者の意味が「影」である(ここで~XはXではないことを意味し、~PはPではないことを意味する)。

という文が続くとすれば、(30)の「花子は」と(31)の「太郎は」は対立の関係にあり、「花子は」の「は」は「主題」の意味を失ってしまう。つまり、ある特定の文の主題は適切な文脈が後に続くと、今まで帯びていた「主題」の意味を失い、「対照」の意味になってしまう。したがって、助詞「は」はどういう条件のもとで「主題」または「対照」として機能するかという疑問が残る。これに関連してここであらためて上の例文(30)と(31)を検討してみよう。

(30) 花子はテニスができるが、スキーはできない。(=(30))

(31) しかし、太郎はテニスもできるし、スキーもできる。(=(31))

まず(30)のなかで「は」が対照として機能している「テニスができるが、スキーはできない」をみると(ここで便宜上、「テニスができる」を「XはY」、「スキーはできない」を「 $\sim$ Xは $\sim$ Y」とする)、文の中に「XはY」に対する「 $\sim$ Xは $\sim$ Y」が明示的に現れていることがわかる。では、次のような場合はどうであろうか。

(32) 花子はスキーはできない。

(32)のなかには対立する文脈は存在しない。しかし、われわれは上の文をみても、花子がスキーはできないが、「スキー以外の他のことならできるかもしれない」という意味が含まれていることを予測することができよう。要するに、対照の「は」でマークされる構成素は文のなかに対立する構成素を持つか持たないかによらず、常に「XはY」と「 $\sim$ Xは $\sim$ Y」の意味を含むといえよう。

一方、(32)の「花子は」は、「花子でない他の人」という意味が含まれているとはいいがたい。逆に、「スキーは」の「は」が主題の機能を担って「スキーについて言えば」という解釈は得られない。しかし、前述のように「花子は」が「花子でない他の人」についての陳述として解釈しうる状況に置かれると、「花子は」の「は」は主題としての機能を失い、対照の機能を担うことになってしまうのである。以上のような例は、「主題」と「対照」の区別が談話依存的であることを示唆しているといえよう。

しかし、ネイティブ・スピーカーの日本人はこれらの二重の機能を区別して使っているはずであるから、「主題」と「対照」を区別する手がかりもあるはずであろう。そこで、その「手がかり」を探る方法として「は」の統語論的な特徴と意味論的な特徴を検討していくことにする。まず、「は」の機能を統語論的に特徴づけるために、寺村(1991)に従い、文中における「は」の分布を検討してみることにしよう。以下の例の下線部分の「は」に注目したい。

(33) a. 最近のこどもたちは野菜をあまり好まない。

b. 幸いなことに雪は降らなかつた。

(34) a. 図書館では小説は読まなかつた。

b. 街には古い建物が一つも残っていなかつた。

(35) a. ケーキを全部食べはしなかつた。

- b. 今年のミス札幌は美しくはないそうだ。
- (36) a. クリスマスパーティに招いてはくれなかった。  
b. 彼に言っては置かなかったが、きっと来るでしょう。
- (37) a. 寒さには弱いインド人は雪中運動会に参加しなかった。  
b. 財産は持っていなかった当時は幸せな日々を過ごしていた。

以上の例からもわかるように、「は」の分布は実に多様である。すなわち、(33)と(34)のような名詞句<sup>28)</sup>の後、(35)のような動詞類の後、(36)のように動詞の述語と補助動詞の間、(37)のように名詞を修飾する埋め込み文のなかに位置することができる。このような分布に関して前述した寺村(1991)の特徴づけに基づいて言うならば、次のようであろう。すなわち、(33)-(37)に分布している「は」はすべて「対照」として解釈することができる。しかし、少なくとも(35)-(37)に分布している「は」が「主題」になることは不可能である。言い換えれば、助詞「は」が「主題」として機能するためには、「名詞句」の後に来なければならない。と同時に、文の最初の位置を占めることが要求されるということを示すものである。

次は、「は」の二重の機能の特徴づけるために、これらが意味論的にはどのような相違を見せるかを考察する。これに関しては益岡(1991)に詳しい。まず、次の例の下線部分の「は」に注目したい。

- (38) a. 太郎はアメリカ人ではない。  
b. 彼女は美しくはない。  
c. 花子は今週のゼミには参加しなかった。

上の下線部の「は」でマークされている要素以外の部分は、いずれも「太郎、彼女、花子」についての陳述である。すなわち、「は」がマークしている「太郎」、「彼女」、「花子」は文の残りの部分と切り離され、「太郎について言えば」というふうに独立することができる。このような主題の振る舞いに関して益岡(1991)は「命題から切り離された独立の存在物として設定され、命題と結合される」(p. 212)のものであると特徴づけた。しかし、「アメリカ人では、美しくは、今週のゼミには」の「は」は、「太郎は、彼女は、花子は」の「は」とは違って益岡(1991)の説く「主題」としての特徴を持っていない。したがって、これらは主題としての役割を担うことは不可能であると言えよう。

以上のことをまとめると、助詞「は」が主題の機能を担うためには、(i)名詞句に添加されること、(ii)文頭に位置すること、(iii)命題から切り離された独立の存在物として設定されること、をその条件としているといえよう。これは、次のようなKato(1985)の指摘とも反しない。

28) ここでいう名詞句とは、名詞及び修飾語の機能を果す構成素を含む名詞句と、それらに格助詞が添加しているものを合わせていう。

「は」句は、文中のどこに現れても対照として機能することができるが、主題として機能するのは主語の前の位置を占めるときのみである。また、主題句は一種の対照句として機能することがあるが、その逆は成立しない。(Kato 1985, p. 60)

以上、助詞「は」の表現機能としての基本的な特徴を考察した。次は、このような「は」の二重の機能が否定文にはどのように影響を及ぼしているかを見ることにしよう。

前節でわれわれは「主題は常に作用域の外に位置し、全く否定されることのない存在である」いうことを考察した。一方、「焦点は常に作用域のなかに位置して現実否定されていると解釈される構成素」をマークする働きをすることを考察した。要するに、「主題」と「焦点」は直接に関連づけられる概念ではない。しかし、日本語の場合、これらの二つの概念は「は」という一つの助詞によって表示されるため「主題」と「焦点」は特別な関係にある。前述のように、「は」が担っている本来の表現機能は「主題」と「対照」である。Kato (1985)はこの点に着目して「文または談話のなかで他の要素に対して「は」によって対立または強調される一つの構成素は結局その文の焦点として解釈される」(pp. 58-59)と指摘した。つまり、文中の対照句は文の焦点であるということであろう。したがって、前述した例の(30)の「花子はテニスができるが、スキーはできない」という文のなかの「テニスは」の「は」と「スキーは」の「は」は対照を表すと同時にこれらの「は」は焦点として機能しているということになるが、以下、本論文ではKato (1985)の用語を借りて焦点を表す助詞「は」を「焦点助詞」の「は」と呼ぶことにする。

### 2-3-3 焦点領域

前項では助詞「は」の機能について考察した。その結果、助詞「は」は、文のさまざまな位置に現れ、その位置によって「主題」の役割を担う場合と「焦点」として解釈される場合が存在することがわかった。さらに、「は」でマークされる構成素が「主題」の役割を担うときは否定されることはなく、また「主題」は適切な文脈が来ると、主題の意味を失い、焦点として解釈されうるということも確認された。したがって、「は」によってマークされる構成素のなかで主題の役割を担っていない構成素は常に焦点として機能するということができる。

本項では、Kato (1985)にしたがい、「は」が焦点助詞としての役割を担っている場合に限定して考察を進めていくことにしたい。まず、次のような例から検討を始めよう。

- (39) 太郎は花子とは学校に行かなかった。
- (40) 太郎は花子と学校に行きはしなかった。

(39)と(40)の「太郎は」の「は」は主題を表していると想定すると、「花子とは」の「は」と「花子と学校に行きはしなかった」の「は」のみが焦点助詞となり、ここでの考察の対象となる。

まず、(39)と(40)の中の名詞句「花子と」に注目したい。名詞句「花子と」は焦点助詞「は」が、その直後に添加している(39)というまでもなく、「花子と」と「は」が離れている(40)でも否定されていると解釈できる。すなわち、これらの二つの文は「太郎が学校に行ったが、花子とではない」ということを意味し、「花子と」が否定の焦点であると言えよう。

ところが、下の例(41)は上の例(40)と同じように、「花子と」と「は」が離れているにも関わらず、

(40)と同じ意味解釈が得られるとはいいがたい。

(41) 太郎は花子と学校には行かなかった。

つまり、名詞句「花子と」が否定されているという解釈はできないのである。上の(41)が意味するのは「太郎が花子とどこかに行ったが、学校に行ったのではない」であって、「学校に」のみが否定され、否定の焦点になっているのである。

このように、焦点助詞「は」による焦点の決め方は多様である。Kato (1985) は、焦点助詞のこのような現象を焦点助詞が影響を及ぼし得る範囲、すなわち、“焦点助詞の領域(略して焦点領域)” (Kato 1985, p. 68) と見て、次のように定義した。

(42) 焦点助詞の領域はそれの最も近い最大投射範疇である。 (Kato の(37), p. 68)

本論文では名詞の最大投射範疇は名詞句であり、動詞の最大投射範疇は動詞句であると想定する<sup>29)</sup>したがって、上の(42)の焦点領域に基づくと、上の例(39)-(40)の焦点領域は、(39)は「花子と」、(40)は「花子と学校に行き」である。このことは、焦点助詞がどこに位置するかが焦点領域を決めるうえで重要な決め手となることを示している。

(43) 花子は次郎とはデートしなかった。

(44) こどもは野菜はよく食べない。

(45) ソウルでは雪はあまり降らないが、寒いです。

上の例文(43)-(45)の下線部分の焦点助詞「は」の焦点領域はそれぞれ「次郎と」、「野菜」、「雪」として一義的に決められると同時に焦点領域は否定の焦点となる。同じことが上の(41)にも当てはまる。つまり、Kato (1985) の説明によると、(41)の焦点助詞の領域は「学校に」のみとなるので、名詞句「花子と」は焦点領域のなかに入ることができないのである。このように、焦点助詞が名詞句に添加されているときの焦点領域はその名詞句であり、同時にそれらは焦点となるのである。

ところが、焦点助詞「は」が動詞類に添加している場合は異なる様相を見せる。上で想定したように動詞の最大投射範疇は動詞句である。したがって、動詞句という一つのかたまりが焦点領域となる。これは焦点領域の中に存在するすべての構成素が潜在的に焦点となりうるとい

---

29) Kato (1985, p. 68) は動詞の最大投射範疇は節全体であるとする。Kato (1985, p. 68) の例を用いると、

(39) a. Taroo wa [<sub>s</sub> getsu-yoobi ni Hanako to gakkoo ni iki-wa-shi-ta]

b. Taroo wa [<sub>s</sub> kinoo kat-ta hon o mot-te ki-wa-shi-ta]

のように焦点助詞「は」の後に位置する「-shi-ta」も含まれている節全体を動詞の最大投射範疇とする。しかし、Kato (1985) では動詞の最大投射範疇になぜ「-shi-ta」が含まれているかについては明確に言及されていない。したがって、本論文では名詞の最大投射範疇が名詞句であるのと同様に動詞の最大投射範疇は動詞句として捉えた方が適切であると考えられる。これに関しては Kato (1985) と異なる立場をとる久保美織 (北海道大学言語文化部) の御教示を参考にした。

うことを意味する。したがって、上の(40)の「花子と」が現実否定されているという解釈が可能なのはこれを根拠としているのである。

このように、焦点助詞が動詞類に位置している場合は、焦点領域は動詞句であり、そのなかに存在するあらゆる構成素が焦点になりうるということは次のような例を通して確認することができる。

- (46) 彼は彼女に手紙を出しはしなかった。  
(47) a. 彼女の妹に手紙を出したのだ。 (彼女に)  
b. 彼女に葉書を出したのだ。 (手紙)  
c. 彼女に手紙を届けたのだ。 (出した)

つまり、(46)の後に(47)の a, b, c の中のいずれの文脈がつづくかによって、(46)の焦点は決められる。このように、焦点助詞が動詞語幹に添加している場合は名詞句の直後に添加される場合のようには決められないのである。

以上、焦点助詞「は」の影響を及ぼし得る領域は「その最も近い最大投射範疇」であるとする Kato (1985) の定義を確認した。しかし、否定文の中には上で定義した焦点領域に反する場合も存在する。前掲した例文(41)に戻って、新たに(41)の意味解釈を考えてみることにしたい。

- (41) 太郎は花子と学校には行かなかった。(=(41))

前項では(41)の意味解釈上、焦点助詞「は」の直前の構成素である「学校に」が焦点となり、「太郎が花子とどこかに行ったが、学校にはではない」という解釈が得られると述べたが、(41)の例文にはもうひとつの可能な解釈が存在する。すなわち、「太郎が花子となにかをしたが、学校に行くことではない」という解釈である。この場合、否定の焦点は「学校に行く」になるといえよう。Kato (1985) はこのような現象を上焦点領域に反する「例外」としてとらえている。

- (48) a. 写真には撮らなかったが、はっきり覚えている光景  
b. 写真に撮りはしなかったが、……。 (Kato の(42), p. 69)

上の(a)は焦点助詞が名詞「写真」に添加しているが、まるで(b)の動詞語幹に添加しているかのように解釈される。このような例文に関して Kato (1985) は、「(a)の焦点はあたかも(b)文のように焦点助詞が動詞類語幹に添加しているように決めるべきである」(p. 69) と説いている。このような現象は次の例にも見られる。

- (49) 雨は降らなかった。

(49)も二通りの解釈が可能であろう。(49)の焦点は「雨」あるいは「雨が降る」であり、前者が選ばれる場合は「雨は降らなかったが、雪は降った」という意味になる。一方、焦点領域が「雨が降る」である場合は「雨は降らなかったが、風が強かった」という意味解釈が得られる。し

たがって、「雨」と「雪」の対立と「雨が降る」と「風が吹く」の対立によって(49)の否定の焦点はそれぞれ「雨」と「雨が降る」となるということができる。

これに関連して、McGloin (1986) の次のような例は注目すべきであろう。

- (50) a. (太郎は花子と) 映画は見なかった。  
b. (太郎は) 花子とは (映画を) 見なかった。
- (51) a. (太郎は図書館で) 本は読まなかった。  
b. (太郎は) 図書館では (本を) 読まなかった。
- (52) a. (太郎は昨日) 学校へは行かなかった。  
b. (太郎は) 昨日は (学校へ) 行かなかった。 (McGloin(42)-(44))

上の(50 a)-(52 a)の文はすべて上に述べたように二通りの解釈が得られる。しかし、(50 b)-(52 b)の文においては焦点領域が「は」の直前の構成素に限定されるという解釈しか得られない。このことは、(50 b)の例では「太郎がだれかと映画を見たが、花子とではない」という解釈は可能であるが、「太郎がだれかと映画をどうかしたが、花子と見たのではない」というような解釈を得ることは不可能であることを意味するといえよう。

では、焦点助詞が Kato (1985) のいう、「あたかも動詞類語幹に添加している」かのように決定されるのはどのようなときであろうか。一つの手がかりとなるのは、焦点助詞の位置である。(50 a)-(52 a)の文はいずれも「名詞+は+動詞」の形をしているのに対して、(50 b)-(52 b)の文はそうではない。McGloin (1986) もこれを「動詞の意味内容と最も密接に結合されている名詞句の直後に「は」が続くとき」(p. 178) に生じる現象として把握している。

さらに詳しくこの問題に関して言及しているのは益岡 (1991) である。益岡 (1991) は上の例文の二通りの解釈をそれぞれ「同型命題の異要素を表示する」<sup>30)</sup> (p. 177) のものと「関係する命題が互いに異型の事態を表す」<sup>31)</sup> (pp. 178-179) のものに分けた。すなわち、前者の焦点領域は「名詞」のみの場合であり、後者は「名詞+動詞」の場合であるといえる。なお、益岡 (1991) も「関係する命題が互いに異型の事態を表す」ためには「述語と補足語」<sup>32)</sup> との間に密接な結びつきがなければならない」(p. 179) と説いている。このことは述語と補足語との意味的な結びつきが強いほど焦点領域は「名詞+動詞」の形になりやすいということであろう。焦点領域を決める決定的な役割を担っているこの述語と補足語の意味的な結びつきを確かめる方法としてまず考えられるのは、益岡 (1991) のいう「補足語が有する意味役割」(p. 180) である。益岡 (1991)

30) 益岡 (1991) は、「同型命題の異要素」について、「太郎が花子には会わなかった」という例の中で「太郎が～に会う」という命題を共通として「～に」の部分のみが異なった場合、「太郎が花子に会う」と「太郎が春子に会う」のように命題間に対立が生ずるようになるが、この際「太郎が～に会う」は同型命題であり、「花子に」と「春子に」は「異要素」であると説いている。

31) 益岡 (1991) は、「雨は降らなかった」のような例で、「雨が降る」と「風が吹く」という命題が対立している場合、その対立には同型の命題を想定することはできないので、これらの例では関係する命題が表わす事態はタイプをことにすると説く。

32) 益岡 (1987) は、述語を補うことによって命題の成立に寄与する成分を「補足語」と呼んでいる。

は「意味役割とは述語に対する補足語の意味的な関係を典型的に表現するものである」(p. 180)と述べている。つまり、「とる」という動詞を例として取り上げるとするならば、動詞「とる」は、「太郎が食事をとる」、「花子が写真をとる」、「雪子が新聞をとる」などのように必ず「～が」、「～を」といった二つの項が要求されるだろう。この場合、二つの項である「～が」、「～を」はそれぞれ述語である「とる」に対する動作の「主体」と「対象」という関係を表すことになる。したがって、益岡(1991)の「意味役割」とは、項が担っているこのような意味的な役割のことを意味するのである。

では、前述したように二つの項を必須に要求している動詞「とる」は、この二つのどちらとより強く結びついているのであろうか。益岡(1987)は次のような例をあげてこの問題を解決している。

(53) Aさんが写真を取ることは…。

(54) a. 写真を取ることは…。

b. \*Aさんが取ることは…。

(益岡 1987, p. 123)

益岡(1987)は「ガ格を捨象した「写真を取ることは…」といった表現が可能であるのに対して、ヲ格を捨象した「Aさんが取ることは…」のような表現は、省略表現でないかぎり、許容されない」(pp. 123-124)と述べ、動詞「とる」は「主体」を表す「～が」よりは対象を表す「～を」とよりつよく結びついていることを説いている。

これに関連して、益岡(1987)の「意味役割の序列」は注目に値する。

(55) 意味役割の序列

着点> 対象> 起点・相手> 動作主・経験者

[に(へ)> を> から・に > が ]

(益岡の(28), p. 132)

上の(55)の序列が意味しているのは述語との結びつきが最も強いものは着点を表す「に／へ」であり、動作主・経験者を表す「が」の方にうつっていくにつれてだんだん弱くなるということである。

さらに、益岡(1991)は「風邪で休む」などの「原因」を表す「で」や「図書館で勉強する」のような「場所」を表す「で」、また「花子と行く」のような「随伴」の意味を表す「と」などの補足語は一般に述語との結びつきが弱く、そのため、焦点領域が動詞まで及ぶことは考えがたいと述べている。したがって、前掲の McGloin(1986)の例(50)に戻ると、次のように説明することができる。

(56) a. (太郎は花子と) 映画は見なかった。

b. (太郎は) 花子とは (映画を) 見なかった。(=50)

(56 a) のように焦点助詞が対象を表す「を」に添加していると、焦点は「映画」と「映画を

見る」の二通りに考えられるが、(56 b) のように焦点助詞が随伴を表す「と」に添加していれば、焦点は「花子と」という一通りにしか考えられないのである。

以上、焦点領域が「名詞＋動詞」となるのは「述語と補足語との意味的な結びつき」に依拠するという益岡 (1991) の見解を概観し、特に重要な概念となる「補足語の意味役割」を検討してみた。

ところで、この問題に関するもう一つの手がかりである「結びつきの慣用性」(益岡 1991 p. 181) に関してもう少し詳しく触れてみることにしたい。

「補足語の意味役割」という観点から見ると、述語と補足語の間の結びつきの強さが同じであっても、その慣用性からは必ずしも同じであるとは限らない。例えば、「人がお茶を飲む」という述語と補足語との結びつきは、「お茶をこぼす」や「お茶を買う」などの結びつきよりは慣用的であるといえる。したがって、「お茶をこぼす」や「お茶を買う」より慣用性の高い「お茶を飲む」のような述語と補足語の間に焦点助詞が添加すると、「名詞＋動詞」の焦点領域になりやすい。

益岡 (1991) が指摘したとおり、「人が酒を飲む」や「人がお茶を飲む」、「人がテレビを見る」や「人が本を読む」、「雨が降る」、「人が車に乗る」などの述語と補足語の結びつきは日本語を母語とする人々にとっては最も一般的に思い浮かびやすい語彙的な情報であろう。さらに、「努力をばらう」や「合図をおくる」また「ベストを尽くす」のような類の表現はいずれも述語と補足語との間に焦点助詞が添加されると、焦点領域は「名詞＋動詞」となりやすいといえよう。

本節では、Kato (1985) が定義した「焦点領域」の概念に基づき、それに関連する言語現象を分析してまとめた。しかし、そのなかには Kato (1985) も認めたように、氏の焦点領域では説明できない例が現実に存在することも判った。そこで本論文では、そのような現象が起る原因となるのは益岡 (1991) のいう「補足語の意味役割」と「結びつきの慣用性」によるものと見、論をすすめてきた。

## 2-4 否定の作用域と焦点との関係

前節までは、否定文を特徴づける下位概念である「否定の作用域」と「否定の焦点」について考察したが、それによって明確になったことをまとめると次のようである。

否定の作用域はそれを含む最小の節であり、文境界を越えることができない。

この定義が意味するのは、文の主題は否定の作用域の外側に存在し、しかもいかなる場合でも否定されることはないということ、作用域の中に存在する構成素はすべて焦点となりうるということである。

一方、否定の焦点は現実に否定されている特定の構成素のことである。焦点は否定の作用域のなかに存在するあらゆる構成素に焦点助詞「は」を添加することによって決められるが、その決まりかたは焦点助詞がどこに位置するかによって多様な在り方をみせることが判明した。

このように、否定の作用域が節全体という広い範囲にわたって存在するため、作用域のみによっては文中のどの構成素が否定されているかを判別することが難しくなる。したがって、ある特定の構成素が現実に否定されていると解釈されるためには、その構成素はこれらの二つの

概念、すなわち「否定の作用域」と「否定の焦点」が互いに重なりあう部分に位置しなければならない。それでは上に述べたことを次の例の「かけっこ」という構成素に注目して確認してみよう。([ ]は焦点領域)

- (57) a. 今度の運動会では、こどもたちが [かけっこ] はしなかった。
- b. 今度の運動会では、[こどもたち] はかけっこをしなかった。
- c. 今度の運動会では、[こどもたちがかけっこをし] はしなかった。

上の3例はいずれも一つの節でできている単文である。したがって、(57)の例のいずれも否定の作用域は「こどもたちがかけっこをする」である。そして当然そのなかにあるすべての構成素「こどもたち」、「かけっこ」、「こどもたちがかけっこをし」は焦点になることができる。上の例(57)を分析すると、まず(57 a)は焦点助詞が「かけっこ」に添加している。したがって、焦点領域は「かけっこ」であり、それは同時に焦点となる。次に、(57 b)は焦点助詞が「かけっこ」の前に位置する。この場合、焦点領域は「は」が添加している「こどもたち」のみであり、ゆえに「かけっこ」は焦点領域のなかに入ることができない。したがって(57 b)の否定の焦点は「こどもたち」であることになる。最後に(57 c)は、焦点助詞が動詞語幹に添加している。この場合は、焦点領域が動詞句であるため、「かけっこ」は焦点領域の内に位置することになる。したがって、「かけっこ」は否定の焦点になることができる。

このように、ある特定の構成素が焦点になるためには「否定の作用域」と「否定の焦点」が重なりあうところに位置しなければならないということを確認することができる。

以上、Kato (1985) の否定の理論を考察した。Kato (1985) の理論の特徴というべきものは「否定の作用域」と「否定の焦点」をそれぞれ分離させ、下位概念として位置付けたことであろう。したがって、この二つの下位概念はそれぞれ全く独立した体系を成し、これらの相互作用によって否定の焦点が決定されることになる。Kato (1985) のこのような分析は今までの研究とは別の視角をもつものであって、Kato (1985) によって初めて体系化されたといえよう。

## 2-5 日本語における否定文の分類

本節では今まで考察してきた基礎理論に基づいて教育内容を構成する際に取り扱うべき日本語の否定文をどのように分類すればいいかについて考えてみる。益岡 (1991) は、否定文には基本的に性格を異にする二つのタイプが存在すると想定し、次のような例をあげている。

- (58) 選手たちは泣いていない。 (益岡の(11), p. 64)
- (59) 選手たちは泣いているのではない。 (益岡の(12), p. 64)

(58)は当該の事態が存在するか否かを問題にし、「選手たちが泣いている」という事態が存在しないことを主張している文である。一方、(59)はある事態の存在を前提したうえで、その事態の叙述の仕方を問題にする否定文である。つまり、選手たちが「なにかをしている」ということを前提として、その事態の叙述として「泣いている」という表現が適切ではないことを主張している。

要するに、上の否定文は「の（だ/です）」を持つか持たないかで、文の性格が著しく変わってしまうわけである。益岡（1991）はこのように性格を異にする二つの否定文を対象として、前者を事態が存在するか否かにかかわる「存在判断型」、後者を事態の叙述様式が適切であるか否かの判断にかかわる「叙述様式判断型」と名付けた。

ところが、前節で考察したように、否定文には「の（だ/です）」を持たなくても益岡（1991）のいう「叙述様式判断型」として分類すべきものがある。言い換えれば、「否定の作用域」と同様であるが、その意味解釈が「叙述様式判断型」と同一なものである。このことは否定文を分けるうえで決め手となるものは文の形式だけではなく、文中のある特定の部分が否定されているか否かということも関わってくることを示す。したがって、上の益岡（1991）の分類に本論文で基礎理論としている「否定の作用域」と「否定の焦点」の概念を取入れることによって、より広い範囲にわたる否定文を収めるようになるといえよう。そこで、本論文では益岡（1991）の分類に即して日本語の否定文を「存在判断型」と「叙述様式判断型」の二種類に分けることにする。

#### 2-5-1 「存在判断型」の否定文

「存在判断型」の否定文は単に、ある肯定の現象を否認する時に使われる否定文である。つまり、ある事態や行為などの現象が存在するか否かを問題にすると、肯定の現象が存在しない、しなかったことを示すものである。

この類の否定文の特徴は特に文中のどの構成素が否定されているかが確定していないことで、当然前提を持たない文である。したがって、この類の否定文は「否定の焦点」の概念は必要とせず、「否定の作用域」のなかに存在しているだけで十分否定文として成り立つ。例えば、次のようなものである。

- (60) a. 数学は得意でない。  
b. この小説はおもしろくない。  
c. りんごを食べなかった。

さらに、「存在判断型」の否定文は、助詞「は」で導かれる主題を持つ「有題の否定文」と主題を持たない「無題の否定文」に分けることができる。これらの否定文は存在判断型という共通点を保ちながら、主題の有無によって否定文としての機能や文の意味解釈が異なる。

#### 2-5-2 「叙述様式判断型」の否定文

「叙述様式判断型」の否定文は、ある事態の存在を前提としたうえで、文のある特定の部分が否定されていることを主張するときに使われるものである。したがって、事態の存在そのものが否定されることはない。表現形式としては、まず基礎理論で考察した「否定の作用域」と「否定の焦点」によって決定される否定文と益岡（1991）がすでに提示した「…の（だ/です）+ない」の文の二つのタイプに大別される。本論文ではさらに、前者にはマルチプル・チョイス式焦点の否定文を、後者には「わけではない」の否定文を付け加えることにしたい。これらの否定文はいずれもある事態を前提とする共通点を持っていないながらも、それぞれ異なる特性を持つものと言えよう。なお、便宜上、前者を（i）内部否定、後者を（ii）外部否定と呼ぶことに

する。次はその例である。

(i) 内部否定

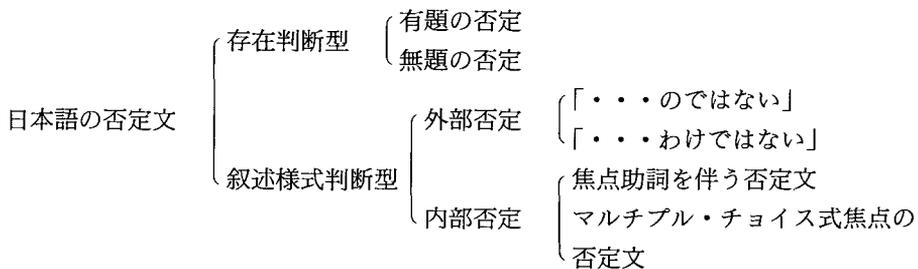
- (61) a. 花子はこどもには招待状を送らなかった。  
b. そのパイを全部は食べなかった。  
(62) 今日は車で来なかった。

(ii) 外部否定

- (63) a. 選手たちは泣いているのではない。 (益岡 1991, p. 64(12))  
b. すべての作品をみたわけではない。

以上、叙述様式判断型の否定文をみてきた。ここで分類した否定文をまとめると、次のような表になる。

(64) 日本語の否定文の分類



次章では、これらの否定文を対象とする教育内容の構成を試みることにする。

### 3章 教育内容としての否定文

前章では、Kato (1985) に基づいて否定文の教育内容に関する基礎理論を考察した。本章では基礎理論から得られた結果を日本語教育にどのように取り入れるべきかの問題を考えてみたい。

教育内容の構成に入る前に本章で取り扱う否定文の性格と本章で構成される教育内容ほどのレベルのクラスで取り扱われるものであるかを示すと次のようになる。

まず、本論文で議論の対象とする否定文は次のような特徴をもつ文に限定する。

- (i) 述語に否定辞「ない」を伴っている形式をとっている否定文  
(ii) 「何らかの意味で「コンテキストの中に存在している」肯定的な命題を否認している」<sup>33)</sup> 否定文

つまり、上の二つの特徴はある特定の文が否定文であるための条件であるといえよう。

33) G. N. リーチ (1987) 『語用論』 p. 144, 紀伊國屋書店

次に、予め断っておきたいことは本章で構成されている否定文の教育内容は、初級段階の学習者向きのものでなく、日本語の文の構造や否定述語の形成など、ある程度文法知識を習得している段階の学習者のためのものである。なお、助詞「は」に関しても同様で、少なくとも基本的な知識、言い換えれば、「は」が表す意味は何か、「は」の表現機能にはどのようなものがあるか等はある程度習得していることを前提とする。

以下、日本語の学習者にとって分かりやすい教育内容の構成を目指して、まず、3-1では既存の試みを検討する。3-2では、前章で分類した否定文をもって3-1の既存の試みの問題点が解決できる新しい教育内容の構成を試みる。

### 3-1 既存の試みの検討

韓国の日本語教育において否定文を教育内容として取り上げ、それを包括的に指導しようと試みた指導書、あるいは教科書は皆無と言っても過言ではない。残念ながらその実情は日本においてもそれほど変わらないようである。しかし、わずかではあるが、日本ではいくつかの試みが提案されているので、そのうちの一つをここに紹介することにしよう。

寺村秀夫ほか(1987)の『ケーススタディ日本文法』に収められている古田啓(1987)の「ケース23 否定とハ」を取り上げることにしたい。その理由は既存の教科書や指導書では主に否定述語の形成や、否定文のうちのごく一部を取り扱っているのに対して、古田(1987)は否定文を包括的に扱おうと試みているからである。このテキストで取り扱われている内容が必ずしも日本語教育の立場から編集されているとは限らないが、ここで参照する価値は充分あると考えられる<sup>34)</sup>

古田(1987)は肯定文(1)に対する否定文として(2)と(3)が存在すると主張する。

- (1) 松男は雪子と結婚した。
- (2) 松男は雪子と結婚しなかった。
- (3) 松男は雪子とは結婚しなかった。 (p. 130)

古田(1987)は上の例について、「例文の(2)、(3)ともに(1)と矛盾するのは確かであるが、それだけでは(2)と(3)の相違について説明できていない」(p. 130)と説き、上の二つのタイプの否定文の相違を認めている。そして、「松男が雪子と結婚した」という事態が存在しないという意味内容を表す文として次の例をあげている。

- ア 松男はそのとき誰とも結婚しなかった。
- イ 松男は月子と結婚した。
- ウ 竹男が雪子と結婚したのだ。 (p. 130)

---

34) 『ケーススタディ日本文法』(寺村ほか1987)の「はじめに」の部分には、次のような言辭が見られる。「本書の目的はあくまでも身のまわりの平凡な言葉づかいを資料にして頭で考える、そしてそれについて皆で議論しあう、そのための資料を提供するところにある」

古田(1987)は、「(2)の場合、アやイの事態と共存しても構わないが、どちらも積極的に想起されるものではない。(3)の場合は、アは考えにくく、イの事態が想起されやすい。そして上の(2)(3)のどちらからもウの事態は積極的に想起されない」(p.130)と述べている。ここで古田(1987)が問題としたのは、

- (a) 否定文(2)と(3)の意味の違い
- (b) (3)の「松男は」の「は」と「雪子とは」の「は」の機能の相違

と纏められる。しかし、古田(1987)の説明には、(a)に関して言えば、それぞれの意味の違いが存在することを指摘したものの、これらの文がどう違っているかについての説明はなされていない。

次に、古田(1987)は上の(3)がイを想起しやすいので、「ナイを含む文節にかかる対比のハがあるときは、そのハは、その文が否定文である理由がそのハが受ける成分にあることを示す。《仮説I'》<sup>35)</sup>」(p.131)と想定した。そして、助詞「は」を「その前にある成分を取り替えた肯定文を想起させるもの」と「これ以上の文脈がないかぎり想起させないもの」(p.131)に分けて、「は」が担っている機能を説明している。次はその二つの機能を区別するためにあげた古田(1987)の例文である。

- (4) 梅男は花子に会わなかった。
- (5) 昨日、花子には会わなかった。
- (6) 当時、僕は金は持っていなかった。
- (7) そのころも僕には相手がいなかった。 (p.131)

つまり、古田(1987)は上の例のうち「その前にある成分を取り替えた肯定文を想起させる「は」」に含まれるのは(5)と(6)であり、「これ以上の文脈がない限り想起させない「は」」に相当するのは(4)と(7)であるといえよう。このように否定文と助詞「は」を結びつけて否定文を分析していることに加え助詞「は」が担っている二つの機能によって意味解釈が異なってくることの指摘は卓見であると言わざるを得ない。

最後に、古田(1987)は「ハの受ける成分」という問題のみを取り扱っている。ここで氏の「ハの受ける成分」というのは次の例から本論文の否定の焦点と同様なものであることがわかる。

- (8) a. 積極的に訂正しない。
- b. 積極的には訂正しない。
- c. 積極的に訂正はしない。
- d. 積極的に訂正するのでは ない。
- e. 積極的に訂正するわけでは ない。 (p.131)

---

35) ここでの「仮説」は古田による。

- (9) a. 完全に分からない。  
 b. 完全には分からない。  
 c. 完全に分かりはしない。  
 d. 完全に分かるのでは ない。  
 e. 完全に分かるわけでは ない。 (p. 132)

古田 (1987) は「(8)a の場合, [訂正しないということを, 積極的に行なう] と [消極的に訂正する] という両方が考えられるが, (8)の b, d, e は [消極的に訂正する] という意味であり, (8)c も [消極的に訂正する] の意味の方がまず考えられる」(p. 132) と述べている。一方, (9) については「(9)の b, d, e は(8)の b, d, e と同様に [一部分, 分かる] の意味と解釈され, (9)a は [一箇所も分からない] と解釈されるのが普通である」(p. 132) と説明している。また, 「(9)c は上の両方考えられ, いずれの意味かは前後の文脈によって判断される」と述べている。また, d, e の「のではない」, 「わけではない」は, 「受ける節をいわばカッコで括る働きをしている」(p. 133) と説いている。

以上, 古田 (1987) の「ケース 23 否定とハ」を検討してみた。古田 (1987) の試みは, 前述したように「は」の機能を否定の意味解釈と結びつけて考えた点では傾聴すべきところが多いが, 日本語学習者に対してそのまま氏の試みを適用するにはいささか抵抗を感じざるをえない。というのは, 上の(9)を例として説明すれば, 提示された文のうち, (9 a) と (9 b)-(9 e) は性格をことにする否定文であることを示すべきであろう。そのうえ, (9 b)-(9 e) の否定文が担っている機能や特性を明確にしておかなければならない。それから, これらの機能や特性の決め手となる助詞「は」が (8c) と (9c) の文ではほぼ同じ位置に添加されているものの, その働きは同じではないことを説明しなければならない。次節では, 古田の試みが抱えている問題点が解決できるような教育内容の構成を目標とする新しいアプローチを試みる。

### 3-2 教育内容の構成

本節では 2 章で考察した基礎理論に基づいて教育プランを作成する時に取り上げるべき内容について考えてみる。ここで取り扱う否定文は 2 章で分類した存在判断型の否定文と叙述様式判断型の否定文である。まず, 焦点助詞を伴っている否定文とそうでない否定文を取りあげ, 二つの文を比較・説明していくことによって否定文における焦点の役割を認識させることを目指す。ここでは主に焦点領域に関して取り扱う。次は否定文を特徴づけるうえで, 欠かせない存在である否定の作用域に関して取り扱う。ここでは主に作用域と関連して主題の「は」と対照の「は」の問題や, 否定の作用域だけで特徴づけられる存在判断型の否定文を取り上げ, それぞれの特徴を比較検討する。最後に, 再び焦点の問題に戻って, マルチプル・チョイス式焦点の否定文, 及び, 焦点助詞を伴う否定文とその性格を共にしながらも異なる特徴を持っている外部否定の「…わけではない」と「…のではない」の否定文を取り扱う。

#### 3-2-1 否定の焦点

前述したように, 否定文には焦点助詞を持っている否定文と持たない否定文がある。これら

の二種類の否定文は形のうえでは非常に類似しながら、焦点助詞の有無によってその意味解釈が異なるので、学習者を悩ませる。ネイティブ・スピーカーあるいは日本語にかなり上達している外国人なら十分その意味の相違が区別できると思われるが、中級ぐらいの学習者にとっては非常に難しい問題である。そこで本項では、この問題を解決するためにこれらの二種類の否定文を比較説明することにする。そうすることによって否定文における焦点の役割を理解することができよう。まず次の例をみることにしよう。

- (10) 太郎はりんごを食べた。
- (11) 太郎はりんごを食べなかった。
- (12) 太郎はりんごは食べなかった。

一般に、(10)は「太郎がりんごを食べた」という事態が存在することを表す文として解釈される。それに対して、(11)は「太郎がりんごを食べた」ということが現実には存在しないことを表す文として上の(10)とは対立していると言うことができる。このように(10)と(11)は単に事態の存在、あるいは非存在を表している文である。

ところが、(12)の文はその様相が異なる。(12)が意味するのは「太郎が何かを食べたが、それがりんごではない」ということである。「りんご」に「は」が添加することによって(11)とはその性格を異にする文になるわけである。(11)と(12)の相違は、(11)が「太郎がりんごを食べた」という事態を否定するための文であるのに対して、(12)は「太郎が何かを食べた」ことを前提として、その食べたもののなかに「りんご」は含まれていないということを表していることである。つまり、(12)で否定されているのは「りんご」だけなのである。

同じことが次の例にも見られる。

- (13) 太郎は花子と結婚した。
- (14) 太郎は花子と結婚しなかった。
- (15) 太郎は花子とは結婚しなかった。

(13)も単に「太郎が花子と結婚した」という現実のことを表している肯定文である。それに較べて、(14)は「太郎が花子と結婚した」ということが現実には存在しないということを表している否定文である。したがって、(13)と(14)からはそれ以上の意味解釈は得られない。しかし、(15)は(14)とは違って、「太郎が結婚した」という事態の存在を認めたとうえでその相手として「花子と」という表現は適切でないということを表している。このことは、(15)で現実には否定されていると解釈されるのは「太郎が結婚した」という事態に関してではなく、「花子と」という表現であることを表わしているのである。このように、焦点助詞「は」が添加されることによって、否定文の性格は全く異なってしまうわけであるが、焦点助詞は上の(12)と(15)のような名詞句のみに限らず、文中のどこにでも位置するという特徴を持っている。そして、その位置によって否定文の意味は変わってしまうのである。したがって、この問題を解決するためには、焦点助詞の領域に関する理論を導入しなければならない。

基礎理論では「焦点助詞の領域はそれを含む最も近い最大投射範疇」という、Kato (1985) の定義を取入れた。焦点助詞は名詞句はいうまでもなく、動詞類、名詞と動詞の間など実に多様

な部分に位置する。それからそれがどこに位置しているかによって焦点領域の在り方は異なり、それによって意味解釈も異なってくる等、焦点助詞が否定文において極めて重要な役割を担っていることが確認された。

それでは、まず焦点助詞が名詞句に添加している場合を取り上げることにしよう。

(i) 名詞句の場合

(1) (修飾語の機能を果す構成素を含む) 名詞句

- (16) 花子はお肉は食べない。
- (17) 東京から手紙は来なかった。
- (18) パリで時計は買わなかった。

上の例はいずれも焦点助詞「は」が「名詞」に添加している。この場合、焦点領域は「名詞」に限定される。すなわち、(16)は「花子が食べるものの候補のなかにお肉は入らない」という意味を表し、当然「お肉」が否定の焦点となる。(17)は「東京からいろいろなものが来たけれども、そのなかには手紙は含まれていない」という意味で、ここでは「手紙」が否定の焦点となる。(18)も同様で、「パリでいろいろなものを買ったが、その買ったもののなかには時計は入っていない」ということを表し、「時計」が焦点となる。要するに、上の例はある特定の事態が存在することを前提としたうえで焦点助詞「は」の添加により、焦点助詞「は」でマークされている構成素はその事態の叙述として適切ではないことを表している。つまり、修飾語として機能を果す構成素を含まない名詞句の場合、焦点領域はその名詞のみに限定され、否定の焦点が一義的に決まるわけである。

次は修飾語の機能を果す構成素を含む名詞の場合を見てみよう。

- (19) (私は) たくさんの女性と付きあっている男性は好きではありません。
- (20) 嘘ばかり言う人は信用できません。

上の(19)の場合、好きではないのは「男性」一般ではなく、「たくさんの女性と付きあっている男性」であるという意味であろう。同様に(20)も、信用できないのは「人」一般ではなく、「嘘ばかり言う人」である。つまり、この場合の焦点領域は修飾節を含む名詞句全体であって、「名詞」と同様に、修飾節を含む名詞句全体が否定の焦点になると言えよう。

次は、(修飾語の機能を果す構成素を含む)名詞句に格助詞が添加している文を取り上げてみよう。

(2) (修飾語の機能を果す構成素を含む) 名詞+格助詞

- (21) スプーンでは味噌汁を飲まない。
- (22) (私は) 8才までは九九を覚えられなかった。
- (23) 花子は雪子ほどは頑張らなかった。

上のように、名詞に格助詞が添加されている「名詞句」の場合も、焦点領域は格助詞を含む名詞句として決められる。たとえば、(21)の焦点領域は「スプーン」だけではなく、「スプーンで」である。そして(22)と(23)は「8才まで」、「雪子ほど」がそれぞれの焦点領域であり、それぞれの否定文の焦点となる。

一方、修飾語の機能を果す構成素を含む名詞句に格助詞が添加している例の場合はどうか。

(24) (私は) たくさんの女性と付きあっている男性とは結婚しない。

(24)も上の(19)と同様で、結婚しないのは「男性」一般ではなく、「たくさんの女性と付きあっている男性」である。つまり、この場合の焦点の領域は格助詞と修飾節がついている名詞句である。この場合も焦点領域と焦点は一致する。

以上は、焦点助詞が名詞句に添加されると、その名詞句が焦点領域に決まると同時に否定の焦点となることを示している。つまり、名詞句の場合は焦点領域と焦点は一致するわけである。

次は、焦点助詞が動詞に添加している場合の例をみることにしよう。

## (ii) 動詞の場合

(25) いつもうちでご飯を食べはしない。

(26) 私は彼女に手紙を出しはしなかった。

上の例のように、焦点助詞が動詞語幹に添加される場合、焦点領域は非常に広くなる。なぜならば、「は」の影響が及ぼし得る範囲はそれぞれ「いつもうちでご飯を食べ」と「彼女に手紙を出し」であるからである。したがって、当然焦点領域のなかの構成素はどの構成素でも否定の焦点となることができる。つまり、(26)の後に「彼女の妹に手紙を出した」という文脈が来るとすれば、「彼女」と「彼女の妹」の対照によって「彼女」が焦点となる。これは他の構成素にも同じように適用され、「手紙」、「出し」、「手紙を出し」、「彼女に手紙を出し」がそれぞれ焦点となりうるのである。同様に(25)の場合も「いつも」、「うちで」、「ご飯」、「ご飯を食べ」、「いつもうちでご飯を食べ」などが否定の焦点となることができる。つまり、焦点助詞が動詞語幹に添加している場合、否定の焦点は名詞句のように一義的には決められないということであろう。

ここまでは、焦点助詞「は」の領域がそれぞれ添加されている直前の構成素あるいは動詞句として決定される例を見てきた。次は上の例とは相反する例をあげてみることにしよう。

## (iii) 名詞句+「は」+動詞

(27) 雨は降らない。

(28) 太郎は花子と映画は見なかった。

(29) 太郎は図書館で本は読まなかった。

上の例はいずれも二通りの意味解釈が得られる。すなわち、(27)は「雨は降らなかったが、雪

が降った」のように、「雨」と「雪」の対照によって「雨」が焦点となる場合が考えられる。もう一つは「雨が降らなかったが、風が強かった」のように、「雨が降る」と「風が強い」が対立し、「雨が降る」が焦点となる場合である。(28)も、「太郎が花子と映画は見なかったが、芝居を見た」の意味解釈と「太郎が花子と映画は見なかったが、スキーをした」という意味解釈が可能である。したがって、焦点となるのは「映画」と「映画をみる」である。(29)も同様に、「太郎が図書館で本は読まなかったが、雑誌を読んだ」という意味と「太郎が図書館で本は読まなかったが、宿題をした」という意味が得られる。したがって、「本」と「本を読む」の二つの焦点が存在する。

このような現象に関する説明としては、益岡(1991)の「述語と補足語との間の意味的な結びつきの強さ」をあげることができる。つまり、「とる」という述語は、「太郎が食事をとる」、「花子が写真をとる」、「雪子が新聞をとる」などのように、必ず、「～が」と「～を」という補足語を要求する。そして、この二つの補足語のなかで述語「とる」とより強く結びついているのは「～が」よりは「～を」の方である。したがって、より強く結びついている補足語と述語との間に焦点助詞が添加した時、焦点領域は後の動詞まで及ぶことになる。一方、「病気で、地震で」のような「原因」を表す「で」、「東京で、図書館で」などの「場所」を表す「で」、「花子と」などの「随伴」の意味を表す「と」のような補足語は一般に結びつきが弱く、そのため、焦点領域が動詞まで及ぶことは考えがたいのである。したがって、上の(27)-(29)は次の(30)-(31)の例とは区別される。

(30) 太郎は花子とは映画を見なかった。

(31) 太郎は図書館では本を読まなかった。

上の例はいずれも「花子と」と「図書館で」しか焦点にならない否定文である。

以上、焦点助詞が影響を及ぼす範囲について検討してみた。その結果、焦点助詞は名詞句をはじめとして、動詞語幹、名詞と動詞の間など、文のあらゆるところに位置することがわかった。さらに、その位置によって焦点領域は変わってしまうことも確認された。本項で取り扱っている否定文を通して、学習者は否定文における焦点助詞の役割を認識するようになるだろう。このことによって、学習者は焦点助詞を伴っている否定文と伴っていない有題の否定文との相違を理解するようになると期待される。

本項では焦点の機能を担っている「は」について考察してきた。しかし、上の「は」を焦点助詞として認めるために明確にしておかなければならない問題が残っている。つまり、(30)の「太郎は」の「は」に関する問題であるが、この問題を解決するために次の項では「は」が担っている二重の機能に関する問題を取り上げる。

### 3-2-2 否定の作用域

前項では、焦点助詞「は」の機能について考察した。しかし、助詞「は」が担っている機能は焦点を表すだけでなく、主題として機能する場合もある。なお、これらの二つの機能は一方が常に否定されているのに対して、もう一方は否定されないという特徴を持ち、相互に対立し

ている。したがって、本項では基礎理論で検討した否定の作用域の概念を導入して「は」の二重の機能を明らかにすることにより、二つの機能を正しく理解させることを目指す。そのために、まず否定の作用域とは何かということを取り扱う。次に、主題を表す「は」と、焦点を表す「は」の相違を理解させるためにそれぞれの特徴をまとめてみる。最後に、否定の作用域の概念によって特徴づけられる否定文である有題の否定文と無題の否定文を比較検討し、それぞれの文の相違を明らかにする。

### 3-2-2-1 否定の作用域とは

否定の作用域とは、否定辞「ない」がその影響を及ぼし得る範囲のことを指す。基礎理論では「否定の作用域はそれを含む最小の節であり、文境界を越えることができない」という、Kato (1985)の定義を受入れた。また、否定の作用域を確認する方法として「だれも、なにも、しか」などの否定文の中にしか現れない要素を採用して実際の在り方を確認してみた。Kato(1985)の指摘のように、「だれも、なにも、しか」などの要素は肯定文のなかに生起すると、非文法的な文になる。たとえば、

- (32) 彼はコーヒーを飲む。
- (33) \*彼はなにも飲む。
- (34) \*彼はしかコーヒーを飲む。

ところが、これらの要素は次のように否定文のなかではごく自然な文になる。

- (35) 彼はコーヒーを飲まない。
- (36) 彼はなにも飲まない。
- (37) 彼はしかコーヒーを飲まない。

(36)は「なにも」が目的語の位置に現れている。一方、(37)は「しか」を主格助詞「が」に置き換えても文法的な文であることに変わりがない。したがって、「しか」は主語の位置に存在することになる。このことは「否定の作用域はそれを含む最小の節である」ということを裏付ける。

ところで、日本語クラスの中級以上の学習者の作文から次のような例を見ることはそれほど珍しくない。

- (38) \*太郎は忘年会にだれも来たことを知らなかった。
- (39) \*花子しかフランス語が話せない人を知っている。

上の例は確かに「だれも」と「しか」が「ない」と共起していることには間違いはないが、文法的な文ではないことも事実である。したがって、このことはなぜ上の例文が非文法的な文であるかという問題を提起することになる。ここではこの問題を明らかにし、学習者に分かりやすく説明するために基礎理論で得られた結果に基づいて次のように分析する。( [ ] は補文を示す)

- (40) \*太郎は [忘年会にだれも来た] ことを知らなかった。  
(41) \*花子しか [フランス語が話せない] 人を知っている。

上の分析は「だれも」と「しか」が否定の作用域の中に位置していないことを示している。(40)は「太郎は～ことを知らなかった」という主文と「忘年会にだれも来た」という補文から成る。つまり、「だれも」は補文の中に、「ない」は主文に位置していることを示している。一方、(41)は「花子しか～人を知っている」という主文と「フランス語が話せない」という補文から成る。この場合も、「しか」は主文に、「ない」は補文に位置する。要するに、「だれも」と「しか」は「ない」の影響が及ばないところに位置することになって、文全体が非文法的な文になるわけである。このことは前述の作用域の定義の中の一つ、「主語+目的語+動詞」からなるものであり、「しか」と「ない」が最小の節の中に共存するときは文法的な文であるが、これらが共存しないと文法的な文にはならないということを裏付けていると言えよう。

以上、否定の作用域は「それを含む最小の節であり、文境界を越えることができない」ということを確認した。しかし、なぜ「主題を表す構成素は否定されないのか」に関する問題にはまだ触れていない。次の項ではこの問題を検討する。

### 3-2-2-2 主題の「は」と焦点の「は」

ここでは「は」の二重の機能である主題の「は」と焦点の「は」を取り扱うことにしよう。まず、二つの機能の間の関係を簡単に述べ、基礎理論で確認したそれぞれの特徴を紹介する。それから、例を通して二つの機能の在り方をみることにする。

助詞「は」は日本語の学習者を悩ませる存在の一つである。それは「は」が担っている二重の機能である「主題」と「対照」の相違によるものと見られる。特に、否定文の場合はこの二つの機能によって意味が全く異なってしまうので、なおさら難しくなると思われる。

基礎理論では、「文または談話のなかで他の要素に対して「は」によって対立または強調される一つの構成素」をマークする対照の「は」を焦点助詞の「は」として認め、主題の「は」と区別した。ところが、主題と対照(=焦点)の区別は必ずしも明確とは限らないので、学習者を悩ませる原因となる。

- (42) 太郎はマラソン大会に参加しなかった。

上の例の(42)は、まず「太郎についていえば、マラソン大会に参加しなかった」という解釈が可能である。この場合「は」は主題の役割を果しているといえよう。また、「太郎はマラソン大会に参加しなかったが、花子は参加した」という解釈も可能である。この場合は「太郎」と「花子」との対立により「太郎は」の「は」は対照としての役割を果し、結局「太郎」が焦点であることを意味している。

このように、「主題」と「焦点」を明確に確定することは非常に難しい。しかし、基礎理論で得られた次のような特徴は重要な手がかりとなると言ってよかろう。

- (i) 主題の機能を担っている「は」の特徴：

- ・必ず文の最初の位置にあらわれる。
- ・「は」の前に位置する構成素は「名詞句」のみと制限される。
- ・「は」でマークされている構成素は文の残りの部分と分離され、残った部分によって叙述される。

(ii) 焦点の機能を担っている「は」の特徴：

- ・文中のあらゆるところに分布し、どこに現れても焦点として機能することが可能である
- ・「は」の前に位置する構成素の制限がない
- ・文中の特定の構成素を取り立てて焦点であることを表す
- ・「は」でマークされている構成素は他の部分と切り離すことができない

以上の特徴に基づくと、「は」でマークされる構成素の中で主題となるものはかなり限定されることがわかる。つまり、次の例のうち、主題となりうるものは(43)、(44)のみである。

- (43) うちのこどもは野菜をあまり食べません。  
 (44) 街には昔の建物が一つも残っていなかった。  
 (45) 毎日学校に行きはしなかった。  
 (46) 全部わかってはいません。  
 (47) 普段は遅れない太郎が試験に遅れた。

(43)、(44)は名詞句の後、(45)は動詞語幹の後、(46)は動詞の述語と補助動詞の間、(47)は名詞を修飾している埋め込み文の中に位置しているが、これらのうちのすべてが焦点となることができる。しかし、主題となりうるものとして(45)-(47)の「は」は除外されると言えよう。また、

- (48) 太郎はアメリカ人ではありません。  
 (49) 彼女は美しくはありません。  
 (50) 花子は今週のゼミには参加しなかった。

(48)-(50)の下線の「は」でマークされている「太郎は」、「彼女は」、「花子は」のような構成素以外の部分(たとえば(48)の場合「アメリカ人ではありません」)は、いずれも「太郎」、「彼女」、「花子」についての叙述である。言い換えれば、下線の「は」でマークされている構成素は文の残りの部分と切り離され、「太郎について言えば」という表現に置き換えることができる。しかし、「アメリカ人では」、「美しくは」、「今週のゼミには」の「は」はいずれも、主題としての特徴を持たないので、これらの構成素を主題として解釈することは不可能である。以上の例から、主題の「は」と焦点の「は」の相違を確認することができるであろう。

### 3-2-2-3 有題の否定文と無題の否定文

本項では「～は…V-ない」という表現形式をとり、ある事態に関する否定的な叙述を目的とする「有題の否定文」と「…が/を…V-ない」という表現形式をとり、単にある事態が存在しない、あるいはしなかったことを表す、主題を持たない「無題の否定文」を取り扱うことにする。

これらの文はいずれも特定の部分が否定されているという意味を持たないという共通点を持っている。このことは、これらの否定文が焦点の概念は必要とせずに否定の作用域の概念だけでも十分特徴づけられるということの意味する。以下、これらの文を比較することによってそれぞれの否定文の特徴を見ていくことにする。

まず、有題の否定文は次のような文である。

- (51) 太郎は花子と結婚した。
- (52) 太郎は花子と結婚しなかった。

(51)と(52)は「太郎」という人物に関する叙述として、一方は「花子と結婚した」という事態が現実存在することを意味し、もう一方は存在しないということを表している。つまり、有題の否定文は主題と否定辞が添加している述語を伴う文である。

次に、無題の否定文は次のような文である。

- (53) 適当なものが見つからない。
- (54) お昼を食べなかった。

これらの文は有題の否定文とは違って、ある事態に関する叙述を表すものではなく、単に、ある事態の不在をあらわす否定文である。

このように、有題の否定文と無題の否定文は両方とも存在判断型の否定文として下位分類されているが、それぞれの特徴は異なる。以下では、この問題について詳しく見ていくことにする。

普通、主題によって導かれる有題文は主に主題になる対象が持っている属性やその対象が行なう行動などを表す。したがって、有題の否定文は「ある対象が持つかもしれない属性、経るかもしれない過程、するかもしれない動作が実際には存在しない、あるいはしなかったことを表わす」(益岡・田窪 1991, p.141) 時の表現であると言えよう。

- (55) a. 昨日は友だちに電話をしましたか。  
b. いいえ、昨日は友だちに電話をしませんでした。  
(現代日本語, 上, 1991, p.99)
- (56) 兄と姉は外国へ留学中でいま家にいません。  
(時事日本語教本, 上, 1985, p.116)

上の例はいずれもある事態が存在するか否かを問題とし、常に否定文と肯定文が互いに対立している。このことは、有題の否定文はある対象の叙述として当該の事態が存在するか否かを問題とする時、当該の事態が存在しないということを表わす文であることを示している。

また、有題の否定文に対して、無題の否定文は次のようにあらわれる。

- (57) 適当なものがみつからない。(時事日本語教本, 上, p.21)

- (58) おなかの具合がよくない。( 川 )  
 (59) 田中が来なかった。(益岡・田窪 1991, p. 140)

上の例はいずれもある事態や現象が起らない、あるいは起らなかったことを表わしている。つまり、「適当なものがみつかる」ということや「おなかの具合がいい」ということが現実に存在しないこと、または「田中が来る」という事態が起らなかったことを表わしている。このように、無題の否定文は単にある事態や現象の不存在を表わす時に使われる表現である。

さらに、無題の否定文は一般的な特徴である「単にある事態が存在しない、あるいはしなかった」ということを表わすことを保ちながら、予測外れや期待外れの表現を表わすことができる。上の(59)を例にすれば、たとえば、昨日のゼミにだれが出席したかが話題になった場合、まず考えられるのは「そう言えば田中が来なかった」という単なる事実を表わす時である。もう一つは「え？ あの田中が来なかったの」という意味を表わし、驚きを表現する時であろう。

このように無題の否定文は、ある事態や現象が当然存在するだろうと予測したり、期待したりしていたが、現実にはその期待、予測が外れたときの表現を表わすことも可能なのである。

ところで、おもしろいことに、上の期待、予測外れなどを表わす否定文は現象文の否定形にも見られる。「現象文とは、目に映じる現象、あるいは存在をそのまま、すべてを新しい情報として、相手に伝えることを目的として発せられる文である」(寺村 1979, p. 66)。言い換えれば、「聞き手のことを意識せずに、ひとりごとのように述べられている現象」であるといえよう。例えば、

- (60) a. あそこに鶯が啼いている。  
 b. バスが来たよ。(寺村 1979, p. 66)

上の(60)はすべて目の前に展開されている現象、すなわち、ある特定の場面をそのまま反射的にことばで表わしている文である。そしてその場面を相手に情報として伝えるかあるいは描写してみせるという特徴を持っている。したがって、これらの文の場合、文末の動詞を形式的に否定述語に変えてしまうと、奇妙な文になってしまう。

- (61) \*a. あそこで鶯がないていない。  
 \*b. バスが来ないよ。

このように、現象文は対応する否定文を持たない。それは、現象文がもともと予測や期待を含んでいない文であるからであろう。

さて、上の(61)の例は現象文という特色を持たない場合でも、否定文として成り立たないのだろうか。結論から言うと、(61)の例は現象文に対応する否定文として見るのではなく、ある予測や期待外れの表現として見ると、立派な否定文として成り立つのである。すなわち、(61 a)は「いつも鶯が啼いているのに、どうしたことか今日は啼いていない」という驚きの表現、あるいは期待外れの表現であるとしたら、全然問題にならないと言える。(61 b)も同様に「いつも決

まっている時間にバスが来るのに、今日はどうしたのか時間が過ぎてもバスが来ない」という意味を表わす文であるならば、否定文として十分認められるだろう。これらの文は、いずれも「鶯が啼く」ことや「バスが来る」ことを予測あるいは期待していたのに、現実にはその予測や期待したことが起らなかったことを表わしている。したがって、これらの否定文の肯定の表現は決して目に映ったものをそのまま表現している現象文ではないのである。

### 3-2-3 否定の焦点 (続)

本項では再び否定の焦点を取り扱うことにしたい。前項で取り上げたのは主に焦点助詞を伴う否定文であった。このタイプの否定文の場合、焦点助詞「は」を特定の構成素に添加することによって焦点が決まることがわかった。

ところが、否定文の中には焦点助詞が存在しないにも関わらず、まるで焦点助詞が付いているように意味解釈ができる文や焦点助詞の添加が不可能な文がある。そこで、本項ではこれらの問題を教育内容として取り扱う際にどのような説明が可能であるかを考えてみたい。まずは、マルチプル・チョイス式焦点の否定文を取り扱い、次は外部否定の否定文「…わけではない」と「…のではない」をみていくことにする。

#### 3-2-3-1 マルチプル・チョイス式焦点の否定文

この項では文中のどの構成素にも焦点助詞が添加されていないにも関わらず、常に叙述様式判断型の意味解釈しか得られないマルチプル・チョイス式焦点の否定文をみていくことにしよう。

- (62) 学校へ行かなかった。
- (63) 車で来なかった。

(62)は「学校へ行ったかどうか」が問題となる無題の否定文である。したがって、(62)には前提がない。しかし、(63)の例は形の上では(62)と同じであるが、その様相は全く異なる。つまり、(63)は「来たかどうか」を問題にするのではなく、すでに来ていることを前提としたうえで、どんな交通手段で来たかを問題にしているのである。このような特徴を表わす否定文をマルチプル・チョイス式焦点の否定文と呼ぶことにする。

益岡 (1991) は、マルチプル・チョイス式焦点とは「焦点になりうる候補者が限定されているもの」(p. 69)であると説いている。たとえば、

- (64) あなたは今日大学へ何で来ましたか。

という質問に対する答は、一般的に「歩いて来ました／自転車で来ました／車で来ました／地下鉄で来ました」などと限定される。そしてこれらの表現のなかから一つを選んで疑問文にするとしたら、次のようになるだろう。

- (65) 今日は歩いて来ましたか。

この例は問題の事態を叙述するものとして「歩いてきた」という表現が適切であるかどうかを問うている。言い換えれば、いくつかの想定されている叙述のなかからの特定の叙述の選択の是非を問題とする文なのである。そしてその答が次のようになると、その特定の叙述が選択されなかったということになる。

(66) いいえ、今日は歩いて来ませんでした。

つまり、上の例文はすでに来ていることを前提としたうえで、「歩いて」という表現は適切ではないということを表わしている。

このように、マルチプル・チョイス式焦点の否定文が存在判断型の形をしているにもかかわらず、叙述様式判断型の意味解釈を得られるのは、一定の叙述の候補者を想定させるから、言い換えると、常に事態の存在を前提としたうえで、その叙述の候補者が適切であるかどうかを問題にするからであるといえよう。

### 3-2-3-2 外部否定「…わけではない」と「…のではない」

外部否定の否定文は前提と焦点を有しているという点で内部否定の中の、焦点助詞を伴う否定文と共通点を持つ。しかし、この二つの否定文は微妙に異なるところがある。外部否定は内部否定の否定文とは異なる独特な役割を果たしていると言えるが、この項ではこれについて検討していくことにする。

まず、次のような例から始めよう。たとえば、「太郎が結婚した」ことを前提として、その相手を表すのに、「花子と」が適切ではないという意味を表わす否定文として、次の(67)と(68)をとりあげることができる。

(67) 太郎は花子とは結婚しなかった。

(68) 太郎は花子と結婚したのではない。

(67)と(68)はいずれも「花子と」が否定されている。ところが、次の肯定文の場合はその様相が異なる。

(69) よろこんで来ました。

(70) 彼が好きだから結婚する。 (水谷 1985, p. 145)

上の例を「来たことは来たが、よろこんでではない」、「結婚はするけれども、彼が好きだからではない」という否定文にするとしたら、

(71) \*よろこんでは来ませんでした。

(72) よろこんで来たのではありません。

(73) \*彼が好きだからは結婚しない。

(74) 彼が好きだから結婚するのではない。

のようなふるまいを見せる。「目的、理由、条件」などを表わす文においてよく見られるこのような現象は二つの否定文を特徴づける重要な手がかりとなるだろう。このように、叙述様式判断型の否定文に属していながらも、これらの文はそれぞれ異なる特徴をもっていることがわかる。したがって、当然日常生活のなかでもこの二つの否定文は違った状況の中で使われるだろう。

これからは外部否定の「…わけではない」と「…のではない」による否定文を取り上げて内部否定の否定文との相違を明らかにすることにしたい。

まず、「…わけではない」と「…のではない」を考察する前にそれらに対応する肯定形「…わけだ」と「…のだ」について簡単に触れてみることにする。

寺村(1984)は、述語の確言形<sup>36)</sup>(例えば、動詞食べる／食べたなど)に後接して話し手のいろいろな主観を表わす形式を二つに分類した。一つは、ダロウ、ヨウダ、ラシイなどのグループで、もう一つは、ハズダ、ワケダ、ノダなどのグループである。

これらの二つのグループのなかで、われわれの関心を引くのは「ハズダ、ワケダ、ノダ」のグループである。寺村(1984)の説明によれば、これらのグループは次のように特徴付けることができる。

現に事実としては聞き手が知っていることについて、その事態が生じた理由、原因とか、背景とか、あるいはある状況に照してみた場合の特別な意味、意義とかを、相手に説明しようとするものだと特徴づけることができる  
(寺村1984)

以上のような特徴を持っている「…わけだ」、「…のだ」及び「…わけではない」と「…のではない」について以下で考察する。

### 3-2-3-2-1 「…わけではない」

前項では「…わけだ」が相手にものごとを説明するときに用いられる助動詞であることを検討した。あらためて言うならば、「…わけだ」は「ある既知の事実Qについて、なぜそうなのかということが問題であるとき(または問題にしようとするとき)、より明白な既知の事実Pを前提として、Pが真なら(またはPということが言えるなら)、そこからの推論の結果として当然Qは真である(あるいはQという言い方もできる)ということを説明する表現である」(寺村1979, p. 56)。つまり、「…わけだ」はある事態が成立すれば、当然ある別の事態も成り立つということを説明するために用いられる表現であると要約できよう。たとえば、

(75) 熱が40度もあるから、かなり苦しいわけです。

(76) 昨日習ったばかりだから、よくできるわけです。

36) 寺村(1984, p. 65)は述語の活用形を言い切って文を成立させる形と後に続いて後の文と関連づける形とに分け、前者の言い切りの形を確言形と呼んでいる。確言形には基本形と過去形がある。

(77) あの子は平成元年生まれです。だから、今年六歳になるわけです。

では、このような「…わけだ」の否定はどのような特徴を持っているのであろうか。次は「…わけではない」に関して考察することしよう。

「…わけだ」の否定形は大別して「…ないわけだ」と「…わけではない」の二種類に分けられる<sup>37)</sup>

まず、「…ないわけだ」に関して言えば、上で考察したように推論の結果として当然 Q ということが言える場合、その結論の部分が $\sim Q$  (否定を伴う)であることを表わしているのである。言い換えれば、 $P \rightarrow \sim Q$  という表現であろう。その例をあげると次のようである。

(78) 札幌は今日断水だそうです。ということは、大学の水道も出ないわけですね。

(79) 山田は、その時刻に田中と学校で会っています。つまり、彼は、犯行時刻には、現場にいなかったわけです。(益岡・田窪 1992, p. 132 (111))

(80) 今年度の決算は赤字だった。じゃ、ボーナスは出ないわけだ。  
(益岡・田窪 1992, p. 132 (113))

これに対して、 $P \rightarrow Q$  という推論そのものを打ち消すのが「…わけではない」という表現である。寺村 (1979) は、まず P という発言をし、自分が P といったことから聞き手はそれなら Q だろうと推論することと考へ(想像し)、その推論を否定するというプロセスであると述べている。つまり、次のようにまとめられよう。

話し手: 「P」

聞き手: 「(P なら) Q」(または、話し手が想像する)

話し手: 「Q わけではない」(寺村 1984, p. 289)

さらに、寺村 (1979, p. 57) は次の例をあげて説明している。

(81) 井住千代という女は、果たしてどういう性格の女なのか。そういう疑問に出会うことがあっても、人々は容易に回答を出そうとはしなかった。いや、彼らに意見がないわけではない。(寺村の(36), 沢野久雄「逆井橋」)

(81)の例は、「井住千代の性格について尋ねても、人々は答えようとしなない」(=P)と聞くと、人は普通は「それはその人に格別の意見がないからだろう」(=Q)というふうにか考へるかも知れないが、実はそうではないのだ」という P から Q を導きだす推論を否定するのである。同じことが次の例にも当てはまる。

---

37) 「…わけだ」自体の否定形は、「…わけではない」の他にも「…わけがない」、「…わけにはいかない」があるが、ここでは「…わけではない」だけを取り上げる。

- (82) 結婚の約束だけしたものの、しかし私はこの娘に指一本触れたわけではなかった。  
(寺村の(39), 川端康成「文学的自叙伝」)
- (83) 別にいまの生活に不満があるわけではないが、たまには一人になりたいときもある。

否定の対象である  $P \rightarrow Q$  という推論が、世間一般の常識、社会通念であって、「Q わけではない」が人々が思い込みがちな常識や考え方を否定する意図から出ていることも多い。

- (84) 老人は、きれいな自然のなかの養老院に入れば、幸せというわけではない。  
(寺村の(38), 竹内宏「柔構造の日本経済」)
- (85) 英文科を出ても、英会話がうまくなれるわけではない。  
(益岡・田窪 1992, p. 133 (115))

以上により、「…わけではない」は「 $P \rightarrow Q$ 」という推論を否定するときに使われる表現であることが確認された。

### 3-2-3-2-2 「…のではない」

前項では「…わけだ」とその否定形「…ないわけだ」と「…わけではない」について考察した。ここでは「…のだ」と「…のではない」について考察することにしよう。

「…のだ」の最も基本的な役割は先行する語、特に「節」、「動詞」、「形容詞」、「名詞+だ」の形をしている構成素をうけて、その全体を名詞化することであるといえよう。言い換えれば、「P は Q のだ」という文型と、「X は Y だ」という文型は基本的には同じものであるが、Y には名詞が来るのが普通であるのに対して、前述したように Q の部文には節や動詞類が来ることが異なる。

しかし、「P は Q のだ」が誘発されるのは「ある状況を認識して、それを理解しよう、あるいは相手に理解させようとする気持ちである」(寺村 1984, p. 309)。したがって、P という状況を Q という状況に結びつけ、ある事実の理由、あるいはある事態の事情、背景を説明する形式であるといえよう。したがって、「…のだ」についても基本的には「…わけだ」と同様に一種の説明の表現であるということが出来る。たとえば、

- (86) 昨日は電話しなくてすみません。忘れたのです。
- (87) 田中がいない。あいつはきっとデートしているのだ。
- (88) 実は、困ったことが起ったのです。
- (89) すみません、車の渋滞に巻き込まれたんですよ。  
(益岡・田窪 1992, p. 132 (117) (118))

このように「…のだ」も説明の表現であることは確かであるが、「…わけだ」が推論を媒介とする説明であるのに対して、「…のだ」は現に起きている事態の背景に関する話し手の主観的な判断による説明である。

では、このような「…のだ」の否定形はどのように現れるのであろうか。「…のだ」の否定形には二種類がある。「…ないのだ」と「…のではない」である。そのなかで「…ないのだ」は、

Pの説明あるいは解説であるQの内容が否定文で表われているに過ぎない。たとえば、

(90) 今日は開校記念日だから、学校へ行かないのです。

これに対して、「…のではない」は、PをQと結びつける考え自体を否定する表現である。つまり、話し手が聞き手の思っていること、あるいは一般の人の考えそうなことを想定し、それを否定するのである。

(91) 昨日は電話しなくてすみませんでした。忘れたのではないですが、…。

(91) こどもの食べ残しが好きだから食べているのではない。

(92) 田中はデートをしているのではない。

いままでは、「…わけだ」と「…のだ」で終わる文を調べてみた。これらの文が共通に持っている特徴は、「説明」を旨とする性質のものであるといえよう。なお、「…わけだ」、「…のだ」の否定形は「…ないわけだ」と「…わけではない」、「…ないのだ」と「…のではない」のそれぞれ二種類が存在するが、このなかで、「…ないわけだ」と「…ないのだ」は「…わけだ」「…のだ」は否定されることはなく、 $\sim Q$ という帰結を表わすだけであるので、叙述様式判断型の否定文として適切であるのは、「…わけではない」、「…のではない」の形式を取っている否定文のみであることが確認された。

以上、外部否定の否定文を考察してきたが、まとめると、外部否定の「…わけではない」と「…のではない」が持っている独特な表現機能としては、「…わけではない」の否定文は話し手と聞き手の間に生じる推論を否定するときに使われる表現であり、「…のではない」の否定文は話し手が聞き手の思っていることあるいは一般の人が考えそうなことを想定し、それを否定するときに使われる表現であるといえよう。

## ま と め

韓国の日本語学習者を対象として日本語の否定文を指導する際の、現在の指導上の問題点を解決するためには、どのような教育内容に基づいてどのように構成すべきかを考えてみた。

現在の韓国における否定文の指導の問題点とは形態中心でパターン化されている一部の否定文しか取り扱っていないので、包括的な否定文の学習がなされておらず、したがって学習者にはごく一部の否定文が提示されるにとどまってしまうことであろう。それゆえに、実際の日常生活の中で使われている数多くの否定文の意味解釈を難しくする結果をもたらしたといえよう。

そこで、本論文ではこの問題点を解決するために、否定文の意味に深く関わる「否定の作用域」と「否定の焦点」という概念を中心とする基礎理論の確立が必要であると想定してこれまでの研究の中で最も進んでいると考えられる Kato (1985) の理論を採用し、論を進めてきた。その結果、Kato (1985) が指摘したように、否定文のなかで実際に否定されていると解釈されるのはこの二つの概念が重なりあっている部分に位置している構成素であることが確認された。

言い換えると、この二つの概念は、日本語の否定文を分類する際にも欠かせないものと確認されたわけである。本論文では上のような性格にもとづいて否定文の分類を試み、二つのグループに分けられた否定文を対象として教育内容の構成を試みた。

なお、教育内容の構成は三つの側面からアプローチしている。

最初に、「否定の焦点」では、韓国の学習者に最も必要とされる否定の焦点を取り扱った。焦点とはなにかを理解させるために焦点助詞を持っている否定文と持たない否定文を対立させ、否定文における焦点の役割を認識させようと試みた。

次に、「否定の作用域」では、焦点助詞を持たない否定文を中心として考察を行なった。主に有題の否定文と無題の否定文を取り上げ、それぞれの特徴を比較検討した。否定の作用域によって特徴づけられるこの類の否定文をあらためて取り扱うことは、焦点が明示されている否定文とこの類の否定文との相違がもっと明確に理解しやすくなると考えられる。

最後に、再び否定の焦点と関わりのある否定文に戻って、焦点助詞を持っている否定文と性格を共にしながらも、独特な表現機能を持っている外部否定の「…わけではない」と「…のではない」の否定文やマルチプル・チョイス式焦点の否定文を取り上げた。その結果、焦点助詞を添加するだけでは正しい否定文の構成ができなかった「理由、目的、条件」を表わす文を、外部否定の形を取る否定文にすることによって正しい否定文の構成が可能になることがわかった。

本論文では日本語の否定文の全体の体系からみると、ごく一部を取り扱うにとどまった。しかし、ここで特定した基礎理論は、否定文の意味解釈の問題を取り扱う際には最も核心となるものであると考えられる。したがって、この基礎理論に基づかないと、数量詞や副詞などの要素が複雑にからまっている否定文を適切に取り扱うことは難しい。

今後の課題としては、この基礎理論を基盤として、否定と数量詞との相対的作用域の問題(たとえば、全体否定と部分否定との対立)、否定と副詞との相互関係の問題、焦点助詞「も、さえ、だけ、しか」などの問題に取り組んでいくべきであろう。そうすることによって、否定文の意味に関する指導上の問題のうち、相当の部分が解決すると考えられる。

なお、このような研究は、より大きなカテゴリーからみると、「ない」を伴っていないながらも否定の機能を果さない文、「ない」を伴っていないが、否定の意味を表わす文、二重否定の文などと共に日本語の否定表現として位置付けられる。したがって、まず核心となる部分を考察してから、他の派生的なものと比較検討することによって、否定表現という全体の指導が可能になると考えられる。

以上のような研究を進めていくことによって、韓国人の日本語の学習者には非常に難しい存在である助詞と否定との問題、副詞と否定との問題、数量詞と否定との関係などの問題が解決されよう。これは日本語教育というより大きな体系の中の相当の部分を占めることになり、ひいては否定文におけるテンス・アスペクトの問題や否定とムード形式との関係などを含む言語現象に広がっていくことによって、日本語の総合的な教育プランの作成を可能にするのではなかろうか。

本研究の究極的な目標は、以上の考察を踏まえた基礎理論の確立とそれに基づいた教授プランの作成及びそれに依拠する実践授業を通して、韓国の日本語学習者にわかりやすく意義のある日本語教育を実現することである。

## 〈参考文献〉

- 井上和子 (1983) 「は」と「が」 井上和子編『講座 現代の言語 1 日本語の基本構造』三省堂
- 井上和子 (1989) 「は」と「が」: 統語構造と談話構造 井上和子編『日本文法小事典』大修館書店
- 岩倉国浩 (1974) 『日英語の否定の研究』研究社
- 太田 朗 (1980) 『否定の意味』大修館書店
- 大竹政美 (1987) 「動詞句における時間表現の指導体系の順序構造」北海道大学教育学部教育方法学研究室編『教授学の探求』第 5 号
- Kato, Y. (1985) *Negative Sentences in Japanese*. (Sophia Linguistica 19, Monograph).
- 加藤泰彦 (1988) 「否定の作用域と文法表示」『上智大学外国語学部紀要』第 23 号
- 加藤泰彦 (1989) 「否定のスコープ」井上和子編『日本文法小事典』大修館書店
- 加藤泰彦・福地務 (1989) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 15 テンス・アスペクト・ムード』荒竹出版
- 金田一春彦 (1978) 「不変化助動詞の本質——主観的表現と客観的表現の別について——」服部四郎ほか編『日本の言語学 第 3 巻 文法 I』大修館書店
- 金田一春彦 (1982) 『日本語セミナー 2』研究社
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 久野 暉 (1983) 「否定辞と疑問助詞のスコープ」『新日本文法研究』大修館書店
- 国立国語研究所 (1978) 『日本語の文法 (上)』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1981) 『日本語の文法 (下)』大蔵省印刷局
- 鈴木康之監修・日本語文法研究会編 (1991) 『概説・現代日本語文法—改訂版—』桜楓社
- 高橋太郎 (1987 a) 「動詞 (その一)」『教育国語』第 88 号 むぎ書房
- 高橋太郎 (1987 b) 「動詞 (その二)」『教育国語』第 89 号 むぎ書房
- Chomsky, Noam. (1977) "On Wh-Movement." In Peter W. Culicover, *et al.* (eds.), *Formal Syntax* (New York: Academic Press).
- 塚原鉄雄 (1990) 「否定表現雑感」『日本語学』第 9 巻第 12 号 明治書院
- 寺村秀夫 (1979) 「ムードの形式と否定」林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会編『英語と日本語と』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第 II 巻 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1989) 「は」と「が」 井上和子編『日本文法小事典』大修館書店
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味』第 III 巻 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 II—言語学・日本教育編—』くろしお出版
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店
- 西尾寅弥 (1972) 「打ち消しの助動詞」『品詞別日本文法講座』明治書院
- 日本語教育学会 (1982) 『日本語教育辞典』大修館書店
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」奥津敬一郎ほか『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子 (1992) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ 5 「も」「だけ」「さえ」など —とりたて—』くろしお出版
- 縫部義憲 (1991) 『日本語教育入門』創拓社
- 野田尚史 (1985) 『日本語文法 セルフマスターシリーズ 1 はとが』くろしお出版

- 服部四郎 (1960) 「付属語と付属形式」『言語学の方法』岩波書店
- 日向茂男・日比谷潤子 (1988) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 16 談話の構造』  
荒竹出版
- 古田 啓 (1987) 「否定とハ」寺村秀夫ほか編『ケーススタディ日本文法』桜楓社
- 細井 勉 (1981) 「日本語を教えてくださいー日本語の論理表現ー」『数学セミナー』4月号
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法一改訂版一』くろしお出版
- McGloin, Naomi Hanaoka. (1987) "The Role of *Wa* in Negation." In John Hinds *et al.* (eds.), *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese 'Wa'* (Amsterdam: John Benjamins).
- マグローイン・花岡直美 (1990) 「否定表現の日英対照研究」『日本語学』第9巻第12号 明治書院
- 水谷信子 (1985) 「否定に関する比較」『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- 森田良行 (1991) 『日本語学と日本語教育』凡人社
- 山崎 誠 (1990) 「否定の焦点について」『日本語学』第9巻第12号 明治書院
- G. N. リーチ (1987) 『語用論』紀伊國屋書店
- 梅田裕之・韓美卿 (1985) 『現代日本語 (上・下)』法文社
- 関聖泓 (1987) 『時事日本語教本 (上・下)』時事英語社
- 許 錫 (1987) 『大学日本語』全南大学校出版部
- 金東秀 (1988) 『ベスト日本語教本』語学界
- 文化外国語専門学校 (1989) 『文化初級日本語 I』凡人社